



## 日本よ、今、闘論！倒論！討論！2025第922回 幕末・明治維新から見た大東亜戦争

R7/8/12

### パネリスト：

久野潤（日本経済大学准教授）

ジェイソン・モーガン（歴史学者・麗澤大学国際学部准教授）※リモート出演

鈴木荘一（歴史家・「幕末史を見直す会」代表）

三浦小太郎（評論家）

矢野義昭（元陸上自衛隊小平学校副校長 陸将補）

吉野敏明（日本誠真会党首・医療問題アナリスト）

司会：水島総

\*\*\*\*\*

水島「皆さん、今晚は」

一同「(礼)」

水島「闘論！倒論！討論！2025第922回目の討論になります。間もなくチャンネル桜創立21周年ということで、22年目を8月15日で迎えます。討論番組も皆さんのお陰で922回まで続けて来ることが出来ました。毎年8月15日近くなりますと、大東亜戦争の問題を色々な角度から考えて来たんですけども、今回は『幕末・明治維新から見た大東亜戦争』というテーマで議論したいと思います。

簡単に言いますと、大東亜戦争というものの自体、結果はともかく、所謂、明治維新という幕末の明治維新、西洋の近代化、こういったものを取り入れた事、或いは、皇室の祭祀や儒教、或いは仏教といったものの祭祀が一切、無くなった。神道というか皇国史観イデオ

ロギーのみになっていったってということとか、色んな形で明治維新の西洋近代化の在り方、こういうもの自体から始まっているんじゃないかという意見があります。そして、現在の世界、グローバリズム対反グローバリズムとか色んな言い方がありますが、少なくとも、これまで500年以上も続いて来た西洋近代の終わりが始まっているんじゃないかと。色んな意味で、西洋の近代主義そのもの自体が問われてきている。そして、日本そのものも戦後80年、昭和100年、こういう中で、もう今、境目に来ている。悪く言うと、本当に滅びの道へ進んでいるんじゃないかという心配、どうしたら本来の日本を取り戻せるかということが表れています。

この間、新聞の報道によると、70年後の世界はどうなっているかと言うと、中国が一番になっている。それから二番目がインド、そして三番目が米国という勢いですが、ヨーロッパがひとつも無い。9位だか10位にドイツが残っている。日本は何処に居るかって言ったら12位。その前にインドネシアとか色んな国が入って来ていて、全く様変わりする世界の、まあ、これは正しいかどうかは別として、こんな予想まで出始めています。そういう中で私達がもう一回、自分の足元、日本という国自体、日本人の在り方といったものも考えてみたいということで、今日、討論をさせて戴くことになりました。では早速ですけど、ご出席の皆さんをご紹介します。まず、歴史家、そして『幕末史を見直す会』代表の鈴木荘一さんです。宜しくお願いします」

鈴木「鈴木荘一でございます。宜しくお願いします」

水島「宜しくお願いします。そして元陸上自衛隊小平学校副校長、陸将補の矢野義昭さんです。宜しくお願いします」

矢野「宜しくお願いします」

水島「評論家の三浦小太郎さんです。宜しくお願いします」

三浦「はい。宜しくお願いします」

水島「日本誠真会党首、医療問題アナリストの吉野敏明さんです」

吉野「はい。宜しくお願いします」

水島「日本経済大学准教授の久野潤さんです。宜しくお願いします」

久野「宜しくお願いしまあす」

水島「そして今日はズームのご出演でございます。歴史学者で麗澤大学国際学部准教授のジェイソン・モーガンさんです。宜しくお願いします」

モーガン「宜しくお願いします。リモートで失礼致します」

水島「はい。宜しくお願いします。今日は、こういうメンバーでお送り致します。まず、21年前のチャンネル桜創立の一つのきっかけになったのが、大東亜戦争の問題でした。オープンした当初、渡辺昇一先生が色々お世話して下さいました。その時、応援するけれども『これを出発点にしてくれないか、水島さん』と言われました。

これは昭和26年5月3日、アメリカ合衆国と上院議員の『軍事外交合同委員会』解任されたマッカーサーが証言したところです。『第二次世界大戦における対日戦略』の中で証言した中で、この部分だけですけれど、この下に英語がありますけど、小堀桂一郎先生が翻訳して下さいました。

『もし、これらの原料の供給を断ち切られたら一千万から一千二百万の失業者が発生するであろうことを彼らは恐れていました。従って、彼らが戦争に飛び込んでいった動機は、大部分が安全保障の必要に迫られてのことだったのです (They feared that if those supplies were cut off, there would be 10 to 12 million people unoccupied in Japan. Their purpose, therefore, in going to war was largely dictated by security).』と。

こういうマッカーサーの証言を、チャンネル桜オープンの時に、番組の終わりとかフィラーで挟んでくれないかということで、1年以上、この言葉を挟んだ覚えがあります。当時は衛星放送でやっていましたけれど、こういう証言がございました。大東亜戦争について、チャンネル桜のスタートは他にもありますけれども、この大東亜戦争をどう見るかということから出発した点がありました。

そこで、もう昭和100年、戦後80年という時期を迎えまして、この大東亜戦争、取り分け幕末・明治から、もう少し大きな目を見た皆さんの見方を御開陳戴いてから話合ってみたいと思います。

東京裁判の証言の記録がございしますが、まず、皆さんから一言ずつ少しコンパクトに纏めて戴いて、大東亜戦争についてどんな風に思っているか。或いは、明治維新、或いは幕末の問題について、どういう関連で考えておられるか意見を述べて戴いたあと、そのフィルムをご覧戴きます。では、鈴木さんからお願いします」

鈴木「私は日中戦争と太平洋戦争っていうのを切り分けて、それで32冊の本を出していますので、今日は、そういう言葉を使うことをお許し願いたいと思います」

水島「はい」

鈴木「それで石破さんが80年談話を出したいということを行っているんですけども」

水島「そうですね」

鈴木「そもそも総理大臣っていうのが歴史法廷の被告ですよ」

水島「うん」

鈴木「それから選挙法廷の被告であると」

水島「うん」

鈴木「その上、石破さんの歴史認識っていうのは、誤りに満ちた東京裁判史観ですね」

水島「そうですね」

鈴木「そうしますと、選挙法廷でノーを突き付けられて、石破さんが歴史法廷の被告であるにも拘らず、過ちに満ちた東京裁判史観に基づいて、ものを話すということになると、これは天に唾する行為であると同時に、これは、勿論、左翼ファシズムだと思っているんですね。ファシズムこそ戦争の始まりでありますから、私は石破さんが非常に危険な道を歩んでいるという風に思っております」

水島「はい」

鈴木「それで、今、社長からお話がありました通り、太平洋戦争っていうのは、アメリカが日本を侵略した戦争ですね。それでハワイ、フィリピン、このあと日本をオレンジ計画に基づいて侵略したと。このことが話の本質であるという風に思うんですけども、村山談話っていうことで、50年前に出したんですけど…」

水島「はい、そうですね」

鈴木「あれを書いたのは、内閣外政審議室長の谷野作太郎さんっていう方な訳ですね。この方は、そのあと中国大使になっておられます。そうすると村山談話を出したのは、村山富市さんと言うよりは、日本外務省のチャイナスクールだったのではないかと」

水島「うん」

鈴木「彼らは国益を追求したのではなくて、省益、或いはチャイナスクールの権力拡大の為に首相談話というものを利用したのではないかっていう風に、私は疑惑を持っているんですね。当たっているかどうか判りませんが。私が以前、この番組に出席した時に、ある若い方だったんですけども、GHQのWar Guild Information Programのことをお話された」

水島「うん」

鈴木「私は全く同感ですけれども、しかし、何方もおっしゃらないんでね、私は、もう、ハッキリ言いますけど、BC級戦犯を含めて3万6千人のリストというものがあって、処刑などされた訳ですけど、このリストは日本人の協力者無しにGHQだけで作れたんですかねという疑問ですよ。それから、20万人を公職追放したんですけど、この20万人のリストを日本人の協力者無しに作れたか。

それから7千冊を焚書ということで処分したんだけど、この7千冊を日本人協力者無しにGHQだけで行ったのかと。それから信書の検閲もやった。これもね、日本人協力者無しにGHQだけでは行えないんですよね」

水島「その通りです」

鈴木「そうするとね、そこには日本人協力者っていうのが、戦争が負けたことによって利益を得た敗戦利得者が居たと思っています。じゃあ、誰が敗戦利得者だったのか。これは、当時、日本人は殆ど英語を喋りませんから、英語がペラペラ喋れる人に限られた一部の語学の達人の方々ですね」

水島「はい」

鈴木「そこは問題だと思う。それから、一般に外務省は平和を目指していたんだけど、陸軍が戦争に踏み込んだんだということを、ずっと我々は言われ続けて来たんですけども、これは全く真逆の嘘で、陸軍は戦争はしたくなかった。早期和平をしたい。撤兵をしたい」

水島「うん」

鈴木「こういうことを言っていたのに、行け、行け、どんどんで嫌がる陸軍の尻を引っ叩いて戦争に押し込んだのは日本外務省ですね」

水島「うん」

鈴木「それで支那事変で、日本が満州を攻略した時、参謀次長の多田駿中将（当時）という方が、もう戦争をやめてくれと。これ以上、続けることは不幸であると。声涙下る論述をして早期和平を念願した訳ですけども、これを断固として拒否したのは外務大臣、広田弘毅ですよ。それから、そのあとの真珠湾攻撃の8か月前だけでも、陸軍省軍務課長の岩畔豪雄（いわくろ ひでお）大佐（当時）という人がアメリカへ行って、それで、ハル国務長官と協議をして日米了解案というものを纏めたんですね。

それで、これを受け入れれば何の問題も無く、若干の損得はあっただろうけど戦争が起きなかった。この日米了解案を断固として拒絶したのは、外務大臣の松岡洋右ですよ。ですから、この戦争を推進したのは日本外務省であって、日本が戦争で負けたら、得意の英語を利用してGHQに取り入って、あっ、こいつがBC級、こいつが、この本って、こいつが…なんてね、裏で日本の戦後権力を確立したのが日本外務省で、これこそ究極の敗戦利得者ではないかと。

ですから戦後80年談話その他の裏には、この究極の敗戦利得者である日本外務省、チャイナスクールの暗躍があるのではないかという疑問を持って、ただ、この私の仮説が正しいか正しくないか判りませんが、色々研究を進めている途中であります。以上です」

水島「はい、有難うございます。実は、私は2千数百冊の焚書になった本を集めたんですよ。その焚書を、お亡くなりになった西尾幹二先生が本にして下さいました。7千数百冊は大体、東大の教授が焚書を選んだ訳ですね。これが今、全国の大学のネットワーク。つまりGHQに協力した連中の弟子の流れが全部、国公立の大学で教授になって、且つ又、今、私立大学にまで及んでいるというようなことは事実として、ほぼ間違いありません。おっしゃるように、そういう敗戦利得者達だということ。それから、我々の共通認識で、もし間違っていたら別の方に言って戴きたいんですけども、例えば、例を挙げれば、読売

新聞は完全にGHQのスパイとして入り込んで、あの正力とかはコードネームまであったと。それで日本テレビを創る、或いは、読売新聞の戦後の在り方。こういった、もう産経を含めて敗戦利得者達がマスメディアを支配するようになっていく。

それから日本財団で言えば、あの『戸締り用心』って言ってやっていた『船舶振興会』とか、こういうような形で、ずうっと利権を貰って、或いは、小佐野賢治とか今、言いましたように国際興業とか、そういうのが大体、今、日本の支配層になっていて基本的に敗戦利得者っていうね、こういうことを貢献した連中が、みんな、いい思いをして居る状態になっているんですね。

今、おっしゃるように他の分野も、単に外務省だけじゃなくて全部、向こうと繋がっている。だから、大東亜戦争の真珠湾攻撃というの、何か麻雀をやっている、通告が遅れたっていうのも結構、怪しいっていうね。外務省で言えば、これは、また出世しているんですね。腹を切らなきゃいけないぐらいですけどね。こういうことも含めて今、おっしゃる敗戦利得者達が、大東亜戦争を主導したっていうか、スタートということは、また、他にあったら議論したいと思いますので宜しくお願いします」

鈴木「(礼)」

水島「はい。こういうのは結構、ずうっとやって来ていますので、是非、未だあったら、お話し戴きたいと思います。では矢野さん、お願いします」

矢野「私は、幕末以来、現代に至るまで、この日本の歴史の基本的な流れっていうのは、世界を支配して来たアングロサクソンとユダヤ」

水島「はい」

矢野「これを中心とした西洋列強との苦闘の歴史だと言っていると思うんですね。それで時期的に言うと、丁度、高杉晋作が功山寺拳兵をやりましたけれども、ここから、幕末の幕府崩壊が始まって、それから40年で日露戦争勝利という、この40年間があって、日露戦争の勝利から40年で大東亜戦争のポツダム宣言受諾と。それで合計80年ですね。そのあと、今度は戦後80年と言われる時代ですけども、前半は大体、1985年頃、昭和60年ですかね。その時期までは高度成長が続いたと。日本の戦後復興の時代だったと。それ以降、今度は失われた何十年と言われていていますが、40年間経って日本が徐々に衰退していく。

しかしイデオロギー的に空洞化していく、そういう時代だったと思います。そういう風に80年、80年、それぞれ前期、後期で40年ずつと分けて、これは、ちょっと図式的で無理があるかもしれませんが、そういう風に大きく見ると、私は文化的な価値観の問題と軍事的な安全保障面の問題、それと経済の問題と、3つの局面で戦いがずっと同時並行的に、お互いに関連し合いながら進んで来たと思います」

水島「うん」

矢野「それで簡単に言うと、幕末から日露戦争までの間っていうのは、一種の代理戦争の時代であって、日本がユダヤとか、特に武器商人ですね。まあ、グラバーなんかもそうですけれども。それからアングロサクソン、後に日英同盟っていうことで日本は進みますけれども、当時、19世紀はグレートゲームと言われるイギリスとロシアのユーラシア大陸全域に渡る大きな覇権争いの時代だったんですけど、その中で日本が極東に於けるイギリスの代理戦争というか、これを戦える勢力として育てられたと、ある意味、そういう時代が日露戦争まで続いた。この時代っていうのは、日本にとっては追いつけ追い越せで、幕末の尊王攘夷という一種の閉鎖的な独りよがりの考え方から、特に、薩英戦争とか馬関戦争を経験した薩長を中心に西洋列強の実力を知った諸藩、特に下級武士団が幕末論の原動力になったと。

それが明治の元勳になる訳ですけれども、彼らが国を引っ張って行ったと。その時に、いち早く西洋列強の軍事的脅威っていうことに気付いているので、彼らが真っ先にやったことは、まず軍事力っていうものを、いかに再建するかということで、幕末に林子平などが出ていますけど、大船と大筒ということをやっていますけど、要するに大きな船を造って、且つ沿岸防備の為、それから船に乗せる大砲を造るということで、その大村益次郎とか山縣有朋とかが明治建軍の中心ですけれども、彼が手を付けたのは軍制改革で、まず、軍の学校を創ると」

水島「うん」

矢野「それから徴兵制を布いて、市民平等の本当の国民皆兵の軍を創ると。従来の藩毎の藩兵とか、それから差し当たっては親兵でなくて、天皇直率の強力な国民軍を創ると。こういうことをやったと思う。それと将校とか士官を育てる為の人材育成の士官学校とか兵学寮と言いますが、まあ、海軍の兵学校ですね。こういうものをつくると。

それから、鎮台を置くとか、そういうような制度的な枠組みを作って、西洋の軍の近代化の成果を非常に取り入れて、それで急速な軍事態勢強化をやったと。これが大体、明治20年頃までに実を結んで、二個師団ぐらいの編成の部隊がようやく作れるようになったと。徴兵制も最初、農兵とか言われて馬鹿にされて全然、人も集まらなかったんですけど、西南戦争で武士団の西郷軍に対して徴兵の部隊が勝ったということで、そこから、ようやく軌道に乗り出して、それで急速な中央集権型の西洋列強並みの軍を創るんです。それと同時に経済面では、その殖産興業ということで官営工場を創って、それを払い下げて財閥を中心に、また官僚と一体になって一種の国家資本主義的体制の下で、急速な国力増強に励んだと」

水島「うん」

矢野「こういうことを背景に、私は一番の根本が、明治の時に信仰の問題と言うか、これが一番、深刻だったと思うんですね。やはりキリスト教の一神教の圧力、まあ、キリスト教の背景には西洋列強の力というのがありましたから、これに対して、いかに日本の独立性を保つかということで、その骨幹になったのが、やはり江戸期からずっと幕末時代に尊王攘夷思想の根源になった、例えば水戸学とか国学とか、或いは、行動の原理になった陽明学、こういう精神性というものが明治時代になって、きちっと最初に出たのが『軍人勅諭』ですね。

これが明治15年に出ているんですけれども、この『軍人勅諭』の中で制定過程で、西周（にしあまね）と山縣有朋が、かなり、やりとりをしているんですが、西は西洋近代思想に、ある程度、同化されていて、彼は西洋的な民主的軍隊、今で言うと民主的な軍隊というものを構想していて、その天皇の直率というような性格よりも、天皇は象徴として、勿論、大元帥ですけれども、軍の統率というものについて、あまり深く記述していなかったんですけれども、これを『軍人勅諭』の冒頭で、忠節ということをや非常に強く打ち出したのが山縣有朋ですね。

それと同時に、正論に惑わず政治に関与せずということで、軍の中立性っていうものがあったと。これは竹林七賢とかがあったこともあるんですけれども、やはり一番、軍の政治からの独立というのは、山縣などが非常に重視したということがある訳です。ですから、国民軍を創る時に、精神的中枢としての天皇というものに対して、その忠誠ということをや軸に置いたと。

それは大化の改新とか、そういう事件じゃなくて、神武創業の頃に帰るんだと。天皇直率の軍隊、皇軍にするという思想が根本にあった訳です。これによって大東亜戦争まで日本の帝国陸海軍の精神的支柱として、ずっと継承されたと。ここが『和魂洋才』というか、

実力主義、実力に於いて、或いは制度に於いては、欧化思想を取り入れながらも、精神面には確固たる伝統的な日本の精神の軸を、しっかり維持したと。

この『軍人勅諭』のあとに今度は『教育勅語』が出ますし、それから、大日本帝国憲法も制定された訳ですけれども、その中に一貫して流れているのは、やはり伊藤博文もそうですけれども、こういう明治の幕末から生き抜いてきた元勲（げんくん）達の江戸期からの精神ですね。これが、ずっと継承されたと。

これが完全に破壊され、否定されて占領軍の意向のままに洗脳され、魂を抜かれたのが、この80年だと言えるんじゃないかなと」

水島「はい」

矢野「その転換点になった中で、一番、大きいのは、やはり前半のアメリカの防共の砦として育てられた前半の40年間」

水島「うん」

矢野「高度成長で朝鮮特需、ベトナム特需で非常に経済が急成長し、復興した前半の40年間。その後はバブルが崩壊し、今度はアメリカが当時、どういう見方をしたかと言うと、もうソ連の脅威というのは先が見えて来た。これからは軍事じゃなくて技術とか、経済の面では日本が一番、強力な敵であるということで、実は、それ以降、構造協議とか色んな形で日本をWeak Japanとして抑え込んで来たんですね。日本がそれ以降、バブル崩壊後、伸びなかった最大の理由がそれだと思っただけですけれども」

水島「うん」

矢野「そういうWeak Japanの体制というのが、ようやくアメリカ自身が行き詰ってしまって、そのWeak Japanの背景にあるグローバリズムが破綻したと。それはバイデン政権迄で、その中で、もう一度、本来の建国当時のアメリカに戻ると。グローバリズムの軛から離れて、もう一度、アメリカを偉大にするんだと言って出て来たのがトランプ政権だと。だから、このトランプの下で日本はWeak JapanからStrong Japanの方向に初めて切り替えられると。むしろ、今、いやいやながら、このStrong Japanの方向に押し付けられているという状況ですけれども、まあ、今の石破政権はそういう全体の流れは解らない中で、むしろバイデン的なグローバリズムの政策。もう欧米では既に破綻している移民とかLGBT、選択的夫婦別姓の問題もそうですし、それから脱炭素の問題もそうですけれども、全てそういった意味で、世界の潮流から外れた流れの中に今、抗っているというか、まあ、そういう政権だという風に思いますね。

だから、その意味では、もう破綻を既に行っていると。問題は、このあと本当の日本の自立化を図るような政党が出て来るか。政治理念が一体何かと言うことが問われる訳ですけれども、やはりそうなると、この80年間、或いは160年間を超えて、もう一度、日本の西洋化に毒される以前の、純粹の日本というものを振り返ると言うことが今、求められているだろうと。

日本の自立化の為には、再び富国強兵というものをやらなきゃいけない。ある意味で江戸期の准鎖国政策に近いような政策をして、日本を純化させる必要があるという風に、私は思っています」

水島「なるほどね。はい」

矢野「ちょっと長くなってすみません」

水島「今日のそういう中で、現在までのことを色々お話し戴いたんですけど、我々が今、一番、問題にしたいのは、先程、鈴木さんもおっしゃっていたことも含めて、つまり水戸学とか色々おっしゃっていた問題、つまり、さっき言ったように仏教とか儒教の総合的な世界観を持っていた江戸時代までの、所謂、皇国イデオロギーという、天皇が現人神と

か、色々な形の中で、実はイデオロギー化したんじゃないかと。

極めて西洋的な形の一つの皇国史観、イデオロギーっていう形がね、これは決して本来の日本の哲学や思想じゃないんじゃないかというところを議論したいところでね」

矢野「あ、一神教に対抗する為に、そういう犠牲というか、執らざるを得なかったと」

水島「うん」

矢野「それが、まあ、敢えて言えば…」

水島「うん。それは一神教に対抗する為には、一神教に対抗する手段がね」

矢野「国家神道、国家史観ということになるのかなと思いますけど」

水島「まあ、その辺は、だから、ちょっと話したいのは…」

矢野「ええ」

水島「実は、現人神で天皇っていう形のものが…」

矢野「本来のものではない」

水島「一神教的な形に対抗する為に、一神教を持って来たんじゃないのかというような問題が、実はね、私は日本の近代っていうのが問われている問題じゃないかと。だから、今、いい問題提起をして戴いたという気がしますね」

矢野「だから、それは、もう、おっしゃる通りですね。私もそう思います」

水島「ちょっと話をしたいと」

矢野「本来の日本ではないです」

水島「うん。この辺の問題を是非、皆さんとも考えたいと思っているんですよ。何故、我々は仏教を捨てたのか。聖徳太子以来の『和を以て貴しとなす』といったものを含めて、或いは、江戸時代までやった武士道の中心だった儒教とか朱子学中心ですけど、こういうものを捨てたのか。

そしてドイツ風の一種の軍人精神とか、もう、これもやっぱり明治維新以来のドイツ風の軍隊組織を創っていくといったものについて、どういう風に考えたのか、これは、やはり問わなきゃいけないっていうことはあると思います。では、三浦さん、お願いします」

三浦「はい。えーと、ですねえ…（失笑）」

水島「それぞれのお立場で言って下さい」

三浦「あ、う、まあ、この宣伝をするのは、ちょっとはしたくないんですが、8月初めに一応、私の名前で本を一冊、出しまして、それは本当は私の名前で出すということが非常に僭越で、その内容は大東亜会議の各アジアの当時の独立国の指導者達の演説集を復刻したもので、それは国会図書館でも読めますしね、何処でも読めるんですけど、一応、活字で本に出せるという形にしたいということで作った訳ですけども、先程から大東亜戦争っていうのをね、皆さんのようなスケールの大きなものじゃなくて小さくて申し訳ないんですけど、私が『大東亜会議の演説集』という本を出版したかった理由というのは、ある人がXでこの本について、日本がアジアの人達を独立させたということで凄く褒めてくれたんですね。

その人は尊敬する人ですけど、ただ私はそういうつもりでやったんじゃないですよ。むしろ大東亜会議に出席して演説しているアジアの各指導者が、いかに自主性を持っていて、日本の傀儡とは全く違う人達だったということを示したくて出した本ですよ。勿論、この自分の本の宣伝は、もう、これでやめますけれども、やっぱり、この大東亜戦争というのが、よく日本がアジアの諸国を独立させた。まあ、それは客観的に東南アジアに関しては事実としてあります。やっぱり日本人は、そのことを卑下する必要はない。

ただ、やっぱり、その時の東アジア独立の指導者達というのは、決して日本に阿った訳で

もないし、日本の言いなりになった訳でもないし、一つのチャンスとして日本を利用した面もあるし、日本に対して非常に尊敬の念を持っているけれども、日本の傀儡ではなかったということを示したくて、この演説集を出版したいということだったんですね。

あと、もう一つは、あとで、また議論になるでしょうが、これも別に私が偉いのではなくて、この雑誌の他の色んな内容については色々議論があるでしょうけれども、今、発売中の Hanada という雑誌で書かせて戴いたのが、林房雄さんの『大東亜戦争肯定論』という本の紹介で、その林先生が書いたのは1960年代ですから、今の歴史的事実の色んな検証とは違うレベルです。

ただ、ここで林先生がおっしゃったのは、この大東亜戦争、実は『大東亜戦争肯定論』と言っているけれども、この本では、大東亜戦争については殆ど書かれていないんですよ。林先生がずっと追及されたのは、幕末の尊王攘夷や国学の思想から始まって、この日本の100年間の当時の林先生の考える江戸から、大東亜戦争の終結までの歴史というのは、やはり西洋列強の世界支配と武力的な世界支配、思想的には西洋の近代化の世界支配ですね。これに対する日本なりのレジスタンスだったんだというテーマで書かれた本で、そういった点では非常に先駆的な方だったと思います。

ただ、私は、先程の水島社長の言葉に対する、別に私の言う思いは当時、日本が独立国家として生き延びる為には西洋列強の近代システムというのを受け入れる以外、多分、道は無かったと思います。それは当時の選択として、他に無かったでしょうね。ただそれによって失われたものが物凄くあると。そのことを今、どういう風に考えるかということが大事だろうと思います」

水島「なるほどね」

三浦「はい」

水島「本をお出しになった大東亜会議の各指導者ですけども、皆さんの為に是非…」

三浦「いやいや、いや」

水島「傀儡でないというのは本当にその通りだと思うんでね。所謂、大東亜共栄圏というイメージを出していたじゃないですか」

三浦「はい」

水島「これには一応、賛同していたんですか」

三浦「まあ、タイはちょっと違うんですけども、彼らが言ったのは、大東亜共栄圏という日本のイメージよりは、やはりアジアというものが、まず、これまでの西洋列強の支配から脱する事。そして、また誰かが誰かを支配するのではなくて、それぞれの民族が今、これは誤解を招き兼ねない言い方ですけども、今風に言ったら、全ての自国ファースト、自民族ファーストの世界ですよ。その上で色んなものが調整されて行かなくちゃいけない。彼らがそういうことを主張したことは確かで、それは当時、大東亜共栄圏という言葉によって表されるものだったんです。

その中では一人一人、一つの国の感覚は違います。だけれども、それぞれの国が自分達の独立の為に、自分達の民族が植民地から脱して、そして堂々と生きて行く為のものであって、日本がアジアのリーダーではあっても、新たな支配者になることを望んでいた訳では全然、無いですよ」

水島「うん。日本自体も、その会議では、そういう形ではなかったですね」

三浦「あ、それは全く無いです。全く無いです」

水島「はい」

三浦「いや、勿論、日本の中には色んな意見がありましたよ」

水島「うん」

三浦「でも、今、公的な話をしているので、日本に於ける大東亜共栄圏っていう発想の中には、日本がアジアの全てを支配するっていう発想は無いです。ただ日本の中にも沢山の人が居た訳で、それは傲慢な人も居たでしょう。特にアジアに対して多いんですけど、細かい話なので止めておきますけども。日本の中には色んな人が居たでしょうけれども」

水島「うん」

三浦「アジアを自分達がイギリスやアメリカに替わって帝国主義支配しようっていう発想は、少なくとも公的な場では無いです」

水島「そうですね」

三浦「はい」

水島「非常に大事なことですね。意外と大東亜会議って不当に貶められているっていうか、過小評価されるっていうね」

三浦「傀儡が集まっただけみたいな（苦笑）」

水島「そういう逆に形になっているんでね。所謂、もう一つは八紘一宇っていうか天下、一家となすようなイメージのものだったんじゃないかと。まあ、建前と本音は色々違うところがあったかも分からないけども、こういうのは建前的には、そういう風に考えていいんですか」

三浦「要するに、それは宣言文であるとか、当時の宣言文以前の重光外務大臣とかのものを読めば、それは基本的には政治ですから、その中には色んな要素が当然、ありますよ。だけど、当時、日本政府が目指していたものは、少なくとも英米の帝国主義支配とは全く違った価値観を世界に齎そうということですね」

水島「そうですね。はい。丁度、満州のことで我々が採り上げた時もそうですけど、あの言い方が冗貴だって言うんだよね（笑）。一家だったら、一応、長男坊で、少し先に金持ちになっているんで元気でね。だから満州国の役人の構成は、大体7～8割が日本人だった。あと他の2割が満州人だったという感じ、これが非常に、よく五族協和というイメージが、これは、いい悪いじゃなくて、結果として、そういうのが現実には、満州国を短い歴史だった訳ですけど、そういうのを、あとは何となく今の感じ解るんですけどね。はい、有難うございます。では、吉野さん、お願いします」

吉野「はい。このテーマの幕末・明治維新から見た大東亜戦争、そういう視点もあった、この現代で考えると、皆さんは歴史やそういう専門家ですけど、僕はいつも、医療で見るとじゃないですか。幕末から明治維新にかけて、戦争じゃないことによって支配されたのって唯一医療ですね。このことは本当に皆さんは言わないし、語られていない」

水島「そうですねえ」

吉野「医者も知らない。医者の方がもっと知らないですね。実はペリーが来て開港させられたじゃないですか。それで色々な条約を結んだじゃないですか」

水島「うん」

吉野「それでクジラの捕鯨をすとか船の修理をすとかって言っていますけども、何を一番、強く言って来たかという、検疫ですよ。外国人が来た時に、疫病が世界中に広まったら困るだろうと」

水島「うん、うん」

吉野「だから医療制度を西洋と同じにきなさいという圧力は、幕末からかけられていたと」

水島「なるほどねえ」

吉野「それで当時の医療制度は、本当は日本が世界で一番、進んでいたんですよ」

水島「うん」

吉野「だから、例えば、色んな医者がドイツやヨーロッパに行って研修をして、北里柴三郎もそうだけど、色々な成果を出したじゃないですか。素地があったんですよね。それを静かなる圧力で替えざるを得なかったっていうのは、それで日本の医師免許制度っていうのをヨーロッパと同じに…」

水島「ああ、なるほどね」

吉野「戦争すること無く変えられてしまって、言い難いんですけど、例の注射ですよ」

水島「うん」

吉野「もう明治時代に、なっちゃったんですよね。これが国際衛生条約っていう、今で言ったらパンデミック条約みたいのを1881年に結ばされてしまって、もう、これからワクチンですよ」

水島「うん」

吉野「それでルールをやられてしまっているというのが一つと、それから、これがずうっと続いて、実は、日本は、このシステムを世界で最先端にしまったんですよね」

水島「うん。うんうん」

吉野「それで何処に行ったかって言ったら、言い難いんですけど731部隊になった訳ですよ」

水島「うん」

吉野「これが東京裁判で誰も処罰されなかったと。有名なのは石井四郎という731部隊の隊長ですけども、これが最初に泳がされたと。情報を全部、出したら一切、大丈夫だと。それから内藤良一という大佐が居た訳ですけども、これは後の、まあ、言い難いんですけど、カットになると困るんですけどミドリ十字とか日赤とかを創っていく訳ですし、これが化血研って一般財団法人、化学及血清療法研究所っていうのを創って、これがその後の明治製薬ファルマですね」

水島「うん」

吉野「だから、ずうっと繋がっているんですよ」

水島「うん。それは分からないからね」

吉野「戦争じゃない方法で支配して、しかも、みんなに合わせろって言う時に、道徳とか価値観とかがって難しいでしょ」

水島「うん」

吉野「共産主義にしろとか社会主義にしろとか。でも、皆がやっているんだから、健康の為にっていうことをやられると…」

水島「自分の命って言われるとね」

吉野「やられていたんですよね」

水島「うん」

吉野「だから、実はそれが幕末から始まって今日に至って、先程、鈴木先生がおっしゃっていましたが、誰が裏切ったんだって言ったら、実際は軍部が裏切ったんですよね。だから、僕ねえ、共通することがあって、恥の文化だと思うんですよ」

水島「うん」

吉野「僕は江戸時代に生きていないから判りませんよ。解らないけども、切腹していたぐらいだから、自分の命よりも魂の方が大事だったから、魂を最初、腹で切った訳ですよ」

水島「うん」

吉野「ところが、もう欧米列強が来たからしょうがないと。先程、先生達、おっしゃっていましたがけれども、もう、しょうがないです。近代化するんだ、西洋化するんだと、軍隊

も創んなきゃいけないんだからというのは解ったけれども、でも大和魂とか恥の文化だけは捨てちゃいけないっていうところがあったはずですよ」

水島「うん」

吉野「それが、どんどん劣化して行って、多分、久野先生と一緒にだと思っけども、今の総理大臣が自分はやらないけど天皇陛下にやらせるみたいなね（失笑）、だから、そんなことをして恥ずかしくないんですかっていうことが、どんどん酷くなって…」

水島「うん」

吉野「これは、やっぱり水島社長がおっしゃった通りで、儒教とか仏教を明治時代に捨てたっていうのは、そこで種が蒔かれていて、どんどん成長してしまっって、最後になったら、自分の命の方が国民より大事でワクチンして、みんなが亡くなっていくというのが繋がっていると。だから、まさか、こんなことになるなんて明治の人達も思っていなかったと思うんですよ。

だけど、今、考えれば、ここを切り抜ける為には仕方がないということがあったし、それから戦争中もそうですよね。たった1年11か月で鈴木貫太郎から始まって、総理大臣が3回も変わる訳ですよ。コロコロ変わると。それは、今の状態と、そっくりですよ。だから責任を取らないと。総理大臣が責任を取らない。何故ってなると、恥も外聞もないからっていうことになっているっていうことが今で、これも今年でもう直ぐ80年ですから、今、ここでね、こういうことを、ちゃんとつまびらかにしておかないと10代、20代が育って全く五里霧中ですよ。何も解らなくなってしまう。

だから、こういう日本人の誇りとか魂っていうものが、ちゃんとあったんだっていうね。その為に裏切った奴も、ちゃんと居たんだけど、そいつらはこういう人達なんだよって、皆は絶対にこういう人間になっちゃいけないんだよって、そういう修身のような教育っていうのを再開しないと、僕は戦争で亡くなった人達が浮かばれないと思いますね」

水島「うん」

吉野「これは別に特攻隊だけじゃなくて、先程も、ちょっとお話ししたんですけど、徴兵されて行きたくもないのに行ったけど、でも一生懸命、戦おうと思っていたら、食べるものがなくて餓死した人達だって立派な戦死者ですよ。そういう人達の方が、よっぽど浮かばれないと思う。それなのに東南アジアの島々に居て、遺骨すら未だ収集されていないという、そういうことを知って、どう思うんだということだと思っんですよ」

水島「うん」

吉野「最後に80年談話の話ですけども、河野談話にしても村山談話にしても、出した談話が得したことが一度も無いですから、こんなものは絶対に出させちゃいけないと」

水島「うん」

吉野「本当にいいのを出しそうだったら、いいですよ」

水島「うん」

吉野「どう考えても、これは20年後、30年後に、何故、あんなことをやってくれたんだってなるに違いないから、僕は何とか止めなきゃいけないっていう風に思っています。以上です」

水島「はい。なるほどね。医療が、そういう意味で、最初からグローバリズムだったっていうのは、私も今日、初めて知りましたが、確かに言われるとそうだけだね」

吉野「うん」

水島「ああ～。はい、有難うございます。じゃあ、久野さん、お願いします」

久野「はい。最初に、ちょっと宣伝じみた話で済みません。こちらは8月1日に本を出させて戴きました。東条英利さんという東条英機元首相の曾孫にあたる方と靖國神社の本で

す。実はYouTubeで対談したのが元になっている本ですけれども、この靖國神社に関する本っていうのは、もう沢山、出ている訳ですよ。沢山、出ているんですが、特に歴史学者とか思想史の学者が出した靖國本というのは、殆どが靖國批判本ですよ。

更に殆どが、やっぱり靖國神社の事を理解せずに、勝手な想定で書いているのが見受けられるので、その辺を整理するというのも、まあ、対談だから緩やかな書き方ですけども、それを心がけて書いたものです。ここで書いたことの 하나가、靖國神社というのは明治2年に東京『招魂社』を創って、後に靖國神社と改称された訳ですけれども、しかし靖國神社の根底にある精神というのは神道も含めて、もう建国期からあると。

だから、つまり祭祀によって日本の国体が支えられているということ。このことにも触れた訳です。そのことを端的に表している文章があるので、ここで上げておきましょう。はい。こちらですね。この水戸藩の会澤正志齋こと会澤安（やすし）の『新論』というところから抜粋しているんですけれども、これは神様を祀るということの話をしている訳ですね。

『山嶽・河海・風雨・草木、百物の神と、皇子・皇孫・名賢・功烈、世に益ある者と』つまり自然界のあらゆるものに神様が宿っているから、それが古事記、日本書紀の神様として神社に祀られるようになった訳だけれども、古事記、日本書紀の神様だけじゃなくて、実際の歴史に存在した皇族の方とか国を支えた武将達、或いは、自分の命を国の為に捧げた忠臣達、そういう風にして日本を守った人達をお祀りするというのが、この『其の祭法は具に令典あり』と。昔からお祀りされてきたんですと。

『徳として報ぜざるなく、功として挙げざるなく』だから、そういう手柄があったら、それにちゃんと報いましょうと。それを後々までちゃんと伝えましょうということですね。

『ざる』『挙げざるなく』だから全て伝えて来たよ。

最後に『天地鬼神該（か）ねざるなく、遐陬僻壤（かすうへきじょう）鎮せざるなし』と。だから、あらゆる神様が『遐陬僻壤』ですから、今風に言えば、都会でも田舎でも、そういう神社、当時は神社というのが今ほど確立していないとしても、神として、ちゃんとお祀りされて来たんですと。

これが本来の日本の姿だから、これを取り戻しましょうというメッセージな訳ですよ。これは、どういうことかと言うと、さっき儒教とか仏教も含む、そういうバランスが大事だというお話だったと思うんですけれども、そのバランスも大事ですが、そのバランスをとるのだから、日本の元の神道があってこそですよ。

その神道というのが、まあ、神道が消えた訳ではないですけれども、鎌倉、室町、江戸と歴史が武家政権、武家社会として進んでいく中で、ちょっとずつ追いやられていった。その話は、また、あとでさせて戴きたいんですけれども、その中で、やっぱり国学というのが江戸時代に起こって、幕末に間に合ったと。幕末の国難を予期したかのように、こういう国難の時に人が国の為に命を捧げたら、どうしなきゃいけないか。それは神として祀るということで、その靖國神社の話へとなくなっていく訳です。

そこで重要なのは、一般の人が靖國神社、特にリベラルな学者の方々が靖國神社を論じると、靖國神社を創って、死んだら神様になれるんですよ、だから国の為に死んで下さいという軍国主義になったという言い方をすることが多いんですが、それは、そうではなくて、さっき申し上げたように、やっぱり、そういう王政復古というのが明治維新の本質ですけれども、それに間に合ったということと、それと逆に、その精神がちゃんと、もう一回、復興された。復興して確立されたので大東亜戦争、あれだけの大きな戦争を出来たということですね。

それが確立していなかったら、やっぱり国の為に命を捧げた人が、ああいう風に顕彰され

るっていうのが確立していなかったら、あれだけの戦争は中々出来ないはずですね。で、その命を懸けた戦争だったんですが、今日は出来るだけ大東亜戦争に身を捧げた先人達に敬意を表して、戦前のここは悪かった、あそこはこうすべきだったということは、あまり言わないようにしたいところですが、ただ、やっぱり一つ大事な話として申し上げるとすると、その大東亜戦争は色んな側面があります。

さっき、三浦先生がおっしゃった大東亜会議に代表されるような東亜解放とか、そういう言い回しもあるし、アメリカの、そういうことに対する対抗っていうのもあるんですが、しかしもう一つ重要なのが、大東亜戦争は防共の戦争でなきゃいけなかった訳ですよ

水島「ん？ぼう…」

久野「つまり共産主義を防ぐ、防共ですよ。はい」

水島「防共ね。はいはい」

久野「はい、だから防共を果たせなかったから、大東亜戦争でアジア独立を助けたはずだったのに、じゃあ、独立したアジアはどうなったかと言うと、共産主義国家がいっぱい出来ちゃったと。だから防共が出来なかったから、そうってしまった。それは、やっぱり、共産主義に対する対抗というのが、何処かで抜け落ちちゃった訳ですね。

私が何故、祭祀の話をしたかと言うと、今の教科書だと明治維新と言われる王政復古。王政復古の時に神道とか、そういうものを取り戻したはずですから、それを基本に忠実に行けば共産主義が入ってくる余地は無いはずですが、残念ながら大正末期から昭和にかけて、政府や軍の中枢にも共産主義者みたいな、或いは、ちょっと悪い意味で共産主義に理解を示してしまう様な方が沢山出て来た訳で、特に象徴的な事例を言うと、三国防共協定というのがありましたね。

日独伊三国防共協定、これは共産主義、つまりソ連とかソ連の衛星国に備えましょうという話だったのに、これも教科書では防共協定強化という間違っただけの言い方をされているんですが、三国同盟になっちゃった。三国同盟になった結果、どうなったかと言うと、日独伊プラス日ソ中立条約を合わせて、ソ連も含めて、ソ連も味方に巻き込んで、米英を牽制しようという話になって、これは、もう防共協定強化どころか、防共を放棄しちゃった訳ですよ。

そうやって防共を放棄して、ソ連に気を許した結果、最後、どうなったかと言うと、昭和20年8月に終戦を迎えたはずなのに、その直前からですけど、その後もずっとソ連が日本侵略を続けて、じゃあ、日本が提携しようとしたものは何だったのかという話になって、だから、やはり、これも王政復古の際の祭祀を取り戻した、まあ、そういう神々との繋がりを、それまで以上に堅固に取り戻したはずなのに、何故か何処かで逸れてしまって、もし反省すべきところがあるとすれば、そういうソ連に気を許す、共産主義を甘く見るということになったことを、ちゃんと教訓にしなければいけないのかなあという風なところを考えています」

水島「なるほどね。はい。東条大将のお孫さんとの対談ですね」

久野「曾孫さんですね。はい」

水島「ええ。由布子さんという方がね」

久野「はいはい」

水島「以前、本とか色々こちらにも出てご紹介戴きましたけど」

久野「はい、はい」

水島「まあ、それと、もう一つ、非常に大事な指摘があったのは、今、共産主義っていうのが、グローバリズムと反グローバリズムっていう形で、つまり、近代主義の徹底したのがヨーロッパの民主主義だ、自由、平等、博愛とか、こういった民主や自由というのが徹

底したのが共産主義じゃないかと。

つまり反共という風に言ったら、西洋近代主義に対する根本的な批判が無いと、共産主義だけで纏めちゃうと、こちら側もイデオロギー的に右と左の争いになっちゃうみたいだね、今、グローバリズムの問題として、この辺のところをどう見るか」

久野「だから、私は反共でなくて、防共という言葉を使っているんですね」

水島「そうですね。だから、その防共というのは、そのところの内容も、ちょっと今に即して逆に聞きたいと思いますけど、だから石破さんのね、さっき言った80年談話をやるかどうかは、まあ、あれとして、つまり彼なんか自分で全く殆ど共産主義者であるという自覚ができていない。自分は、保守の自民党の代表みたいなつもりで出そうなんて思っているんじゃないかっていう感じもあるんでね。また、そういう話も是非、したいと思います。それではモーガンさん、お願いします」

モーガン「はい。有難うございます。今日はリモートで大変、失礼致します」

水島「いいえ」

モーガン「先生方のお話を拝聴して本当に勉強になっております。社長が冒頭でご紹介して下さったマッカーサーの証言、昭和26年5月3日の安全保障の為に日本がやったとか、その証言が前から、とても重要だと思っているんですけども、今日は、もう一度、紹介して戴いて、やっぱり足りない部分があるのではないかと思うようになりました」

水島「うん」

モーガン「それは、どういうことかと言うと、実は、昨日まで九州に行っておりました。九州の方々は今、大雨で大変になっているんですけども、発表会があって、その中で玄洋社とか黒龍会とか、そういった九州の歴史を研究する為に行って来たんですけども、安全保障だけで明治維新と大東亜戦争が、ちょっと理解できないのではないかと感じて、例えば鈴木先生が冒頭でおっしゃった敗戦利得者は絶対にその通りだと思いますが、その敗戦利得者とは何かと前から不思議に思っているんですよ。何故、日本人が、あんなに簡単に外国人の前にひれ伏して、外国人に日本人の富とか命を売り出したかと不思議に思っていましたけれども、玄洋社とか九州の立場から日本近現代史を見ると、すっきりしたところがあります。

それはどういうことかと言うと、安全保障は、やっぱり中央政府の立場から見たものじゃないですか。自分のポジションを確保する為にね。大東亜戦争でも明治維新でもそういった側面もあったと思います。しかし、私はどちらかと言うと西郷隆盛とか遠山満とか宮崎滔天とか、そういった自由民権運動とか、そういった、ちょっとワイルドなところのある人間が大好きですよ」

水島「うん」

モーガン「安全保障ばかり考えているのが、中央政府ですけども、安全保障ばかり言っている中、一般国民が苦しむじゃないですか。九州から来た武士とか、そういったワイルドな人間が定期的に中央政府をやっつけてくれて、そういう国内バトルと言いますか、官僚をやっつけてくれる武士の存在がとても大事ななあと感じています。

先程、三浦先生がおっしゃった大東亜会議とか、それは日本人が支配者でないとかって、それは、その通りだと思いました。やっぱり九州とか玄洋社とか宮崎滔天も取り分けそうですけれども、本当に博愛って言うんですか、アガペーって言うんですか、あのキリスト教の影響を受けているんですけども、逆にキリスト教の影響を受ける前、全人類に対する愛情に溢れている日本人の魂があったと、私は思います。

それで悲劇的なことが、こうだと思います。例えば明治維新、えーと、失礼ですけども、例えば、この鈴木先生の一冊の本『アヘン戦争からの明治維新』って、西洋は、こう

いうものじゃないですか。勝手に人の国に入って侵略して富と命を奪って、それは西洋なんですよ」

鈴木「(頷く)」

モーガン「但し日本人が非常に早い時から、この西洋の本質に気づいているのは、焚書を読めば解る。日本人がプロパガンダに弱いと言われているんですけど、それはプロパガンダです。日本人はプロパガンダに弱くないです。大変、深いレベルまで西洋の本質を解っていたんですよ。だから動きました。

だから大陸浪人がアジアまで行って色々な行動を執っていた。大東亜戦争の時でもアジアを解放しました。もう西洋の事をよく解っていたから。そういった側面もあったんですけども、悲劇的な事は明治維新の時に、先程、言葉が出たんですけども『和魂洋才』で、考えてみれば『和魂洋才』の前に和魂『漢才』だったじゃないですか。

中国の才能を使って、和の日本の魂を大切にする。『和魂漢才』は、ある程度まで出来ると思います。何故かと言うと、中国の官僚制度とか律令制度とか、そういった中国の考え方、または陽明学とか儒学とか、そういった考え方を受け入れても、日本の魂は未だ健全だと。そういった和洋折衷じゃなく、和漢折衷は出来ていたと思います。

しかし和魂漢才が和魂洋才に切り替えられると、その西洋っていう文化は癌細胞だと、私は思います。西洋思想、啓蒙思想とかは癌細胞です。近代化しなければならない、組織化しなければならない。そういった急務があったと、私は認めています。そこは、日本が、その当時、ある程度、西洋の真似をしなければ西洋に負けてしまうっていう、非常に悲劇的な立場に置かれていたと。

しかし和魂洋才は根本なレベルで矛盾していますので、例えば、その戦争で負けてしまって、そのあと今の日本の政治家を見ると和魂はゼロです。洋才ばかりです。安全保障とかという考えばかりで、日本人の魂を癌細胞の列強に売り出している訳です。それが明治維新から続いている一つの悲劇ではないかと。

今、何が必要かと言うと、非常に過激なことに聞こえると思いますが、中央政府をやっつけてくれる武士が必要だと思います。恥ずかしいことをやる政治家に、非常に厳しい事をやってくれる武士が絶対的に必要だと思います。要は洋才を捨てて、日本の魂を取り戻す事が今、私達の義務なのではないかと考えています。

大東亜戦争は九州の歴史、玄洋社の歴史からすれば、それは当たり前のことです。当然なことです。人が西洋者に耐え、虐げられている、虐められている。じゃあ、そういう人々を助けに行く八紘一宇、それは日本人の魂ですよ。でも和魂洋才になってしまうと、やっぱり、その洋才がどう考えても勝ってしまうと、私は思います。

今は洋才ばかりになっていて和魂が何処かに消えてしまった。最後ですけども、和魂は非常にワイルドな所があると思います。非常にいい意味で、そのワイルドな魂を取り戻して、日本人の元々あった西洋がやって来る前にあった美しく、ちょっとワイルドな人類に対する愛が溢れている。他人の為に自分の身を賭しても厭わない、そういった美しい愛を取り戻す事が、これからの課題ではないかと考えています。ごめんなさい、整理されていない中の話ですけども、取り敢えず、そういうことを考えています。以上です」

水島「ああ非常によく解りました。有難うございます。はい。本当に、よく、こういう話で出るのは、まあ、私も出しているんですけど、佐賀の武士の葉隠れの忠臣蔵論ですね。本当に敬愛するというか藩主に対する腹を切った時は、あんな計画を立てて復讐戦を行うというね、ああいう綿密なものは武士ではないと。翌日、主君が腹を切ったら、みんな、刀一本、引っ提げて吉良屋敷に斬り込みかけると。それで全員、討ち死にしてもいいという、これが本当の武士だと山本常朝が葉隠れの中で言っているんですけども、こういうの

も含めて色々な考え方が、特攻隊なのか何だか解りませんが、そういった愛する者の為とか本当に大事なものの為には命を懸けるっていうやり方、色々なやり方があるんですけども、こういう一つの九州のね、ああいう玄洋社にしる新風連にしる色々な流れが、やっぱり九州は面白い所だと思います。

では、私が南京の映画の中で使ったフィルムで、東京裁判に関するもの、これは大体、何分ぐらいかな」

スタッフ「7分ぐらいです」

水島「7分ぐらいのものですけれども、一応、東京裁判の判決まで、その映画の一部を纏めてありますので、ご覧下さい。じゃあ、お願いします」

## <ビデオ開始>

### 草莽崛起

映画『南京の真実』製作委員会（株式会社チャンネル桜エンタテインメント）  
株式会社ワールド・インタラクティブ・ネットワーク・システムズ・ジャパン  
水島総 監督作品

草木みな ものいうことあり 日本書紀

くらきより くらき道にぞ入れぬべき はるかに照らせ 山の端の月 和泉式部

男児「あの日は、とても暑かった」

昭和二十年三月十日 東京大空襲

米軍の東京大空襲は  
この夜だけで十万人を虐殺した

世界の歴史上でも  
例の無い大虐殺だった  
米軍の無差別爆撃は  
100万を超える日本国民を虐殺した

昭和二十年八月六日  
広島市にウラン型原子爆弾投下

昭和二十年八月九日  
長崎市にプルトニウム型原子爆弾投下

原爆投下によって  
広島、長崎の市民三十万人が  
虐殺された

その日から  
南京大虐殺三十万人の虚構が準備された

男児「誰が僕らを殺したの」  
女児「静かに。未だ終わっていない」

極東国際軍事裁判所

昭和二十三年十一月十二日  
極東国際軍事裁判（東京裁判）判決日

ウィリアム・ウェブ裁判長『極東国際軍事法廷は、裁判所条例第十五条に従って  
有罪の判決を受けた被告に対し刑を宣告する

被告 土肥原賢二 絞首刑  
被告 広田弘毅 絞首刑  
被告 板垣征四郎 絞首刑  
被告 木村兵太郎 絞首刑  
被告 松井岩根 絞首刑  
（被告 武藤章） 絞首刑  
被告 東条英機 絞首刑

男児「僕らは何処へ行くの」  
女児「遠くへ行くの」

処刑台の映像  
<ビデオ終了>

水島「はい。途中をバンバン抜いて、東京裁判の部分を、もうちょっと入れる予定だった訳ですけど抜けています。私はアメリカに行って、フィルムセンターで東京裁判のフィルムを出してくれと、4回に渡って交渉しました。これは日本財団の笹川会長、今の会長ですけども、渡辺昇一先生と出向いて東京裁判の全てのフィルムを日本にプリントして、コピーして戻して貰えないかと。その為に数億円がかかるかも分からないけれども、資金を出してくれと言ったら、その時、笹川会長は『あぁいいですね、それは凄く面白い、やらなきゃいけないことですね』と言ってくれました。渡辺昇一先生と私は本当に喜んで、先生、良かったですね、これで一つ大きく日本の中に本当の姿を観て貰えると話していたんです。ところが、そういう返事を戴いたんですけども、2週間経っても3週間経っても返事が来なかったので、私から電話しました。どうなっているんですかって言ったら、事務局長が出て、フィルムセンターをご紹介しますと。いや、そういう話じゃないですと。全東京裁判の記録を全て日本に戻して字幕を入れて、どういうものだったかを広く知って戴く。そういうことで出して戴く、ご支援を戴

けるっていうお話だった訳です。そのようには伺っておりませんと。こういう風になりました。

それからアメリカへ行って、本当に飛行機代も何もかも費やして4回に渡ってフィルムを出してくれ、特に南京の部分に関して松井岩根将軍を含め全部、出してくれって言うと、ありませんって言うんです。いや、あるはずだって言うと、そうすると、実は出して来たものもあるんです。映画の中で東京裁判の記録で使われているものは、松井さんが何かって言うと、例えば人定質問で、貴方は誰ですか、松井岩根です。住所は何処、どうだこうだと。この証言は正しいですか。一部、間違っています。それでバツンツですよ。内容の事は殆ど全部、切られちゃっている。これを出さないです。一切、出さない。

その中で私の映画で使えるものは全部、使っていますけども、今は勿論、時間が無いのでやっていませんけれども、こういうような形で、この問題に関して、あまり言うと、これもバンされる。ワクチン注射と同じで、ちょっと言い難いんですけど、この問題に関しても全くのタブーになっています。

先生が、じゃあ、日本財団の笹川に頼もうかと言った時、私は勿論、いや、ちょっと無理だろうなあと思っていましたけど、会長がそういうお返事だったので本当に喜んだんですけど、そういうところですね。これを出さず訳にはいかない。例えば、裁判のシーンで、中国人の証言者が出て来て、一晩でグルグル回って何万何千何百何十人が殺されました。それを見ましたって証言する訳だけど、お前は戦闘中の南京市内で、そんな少年が市内中を駆け回って数まで数えるなんて出来る訳がないっていうのは、裁判記録を見れば判るんだけども、こういう状態で、とにかく大事な情報は一切、我々の所に出していないので、ずう〜と戦って来ましたが、この問題に関してもそうだし、今、一部、二部、1本、2本目を作りましたが、これをYouTubeで流す事は出来ません。

今、こちらでは別のサーバーを使って、もし興味があったら観て下さいって形でやっています。このぐらい21年前に始めた頃、最初から、こういった言論弾圧っていうのは凄い状態でやられています。

こういうものについて、やっぱり今年、中国が南京の映画を作って大ヒットしている。この間、蘇州で日本人女性が殴られたという事件がありましたけど、これから起こると思いますけども、また、これで、私は今年中に何とかフィルムに繋げたものをもう1本作りたいと思っています。正直言うと20年間、誰もやらなかったですよ。私のことを何だかんだと色々言う人が居ましたが、誰か一人でもやってくれたかと。日本の中では居ないんですよ。はっきり言いますが居なかったです。私は今年、また、これをやります。いい歳になってきましたけども、本当に、こういう東京裁判の問題も、実際は知らされないまま、これねえ、ちょっとねえ、全然、違う、実は今日、こういうものじゃなくてブレークニーという人達が発言しているところが欲しかったんです。今、生放送でね、何をやっているんだって言いたいんだけど、私もギリギリだったので、あのブレークニーと日本側の弁護人が、この裁判は違うということを言っているところが、用意出来たら、して貰いたいけどもねえ。間に合えばだけど。本当にそのところを見せたかったんです。

一体、誰が原爆を落としたんだと、誰が犯罪者なんだっていうことを、ブレークニーという、途中で解任されたアメリカ人の弁護士が居ますが、実は、こういう話をやっているんですね。それから、あの人は今、出て来なくなっちゃったけど、国会の議長をやった方で、弁護士の…」

鈴木「清瀬。清瀬一郎氏」

水島「ああ、そうですね、はい。そういう方が、きちっと東京裁判の不当性、平和に対する罪とか、事後法で、こんなもので裁けるのかということも含めて、しっかり言っている

んだけれども、証拠も全部、採用されなかった。我々は、こういうことを繰り返し、やって来ましたけども、今になると本当にそれがチャラになっちゃっているっていう状態で、いい情報が若い人達に与えられていない。

そして、私自身も、さっき吉野さんが言った医療の問題で言うとね、確かにそうだ、そういうところがあったんだっていうことを今日は初めて聞いたっていう、不勉強で申し訳ないんだけど、実は、こういう状態が非常に繰り返されているっていうことも含めて、皆さんに理解して戴いて、今日、後半の討論に行きたいと思います。ちょっと早目ですけど、一回、お休みさせて戴いて、さあ、このあと、どうするっていうことを議論したいと思います。はい、一回、お休みします」

一同「(礼)」

### <後半>★

水島「はい。後半になりました。少し後半を早目に始めましたけど、実は、先程、流したテープの映像が頭を付けて、間を抜いて、最後にぽんってね、大事なブレークニー弁護士とか色んな人達が東京裁判の不当性というものを映し出しているフィルムがちゃんとある訳ですよ。ところが、これも一切、メディアでは流れません。あのブレークニー弁護士の大変、説得力のある発言とか、本当はAIの時代になりますから、ああいうものを全て音声化して、全部、東京裁判の全記録をつくりたいと思っているのと、私のところでも、二千数百冊の焚書を何とか集めました。

西尾幹二先生が11冊の『焚書図書開封』という本にしてくれましたけど、まだまだ、やる価値があるところですから、やる気のある方はお申し出ください。これをデジタル化して、所謂、焚書図書館みたいな形にしたいと思っています。誰でもが研究できるようにしたいと思っていますけども、是非、皆さん、こういう形で一個一個、やっていくしかないのですね、研鑽しながらやっていくっていうことを考えたいと思います。

そういう意味で、今日は色々な問題点を挙げて戴いたと思うんですけど、鈴木さん、色々聞いた上で、また、お話し戴けますか」

鈴木「先程もお話に出ていましたけど、林房雄さんの『大東亜戦争肯定論』ですね」

水島「はい、肯定論ですね」

鈴木「私は高校生の時に、これを読んで、もう感動して、未だに古ぼけていますが、本棚の真ん中に刺さっているんですね」

水島「そうですね」

鈴木「ええ。ただ、私も、この歳になりますと、全面的には、ちょっとどうなのかなあっていう疑問が出ているんですけど」

水島「はい」

鈴木「あの戦争のお陰でね、植民地だったアジア・アフリカ諸国が独立した。これは歴史の事実であり、且つ真実であります。う～ん、ただ我が国は、国際連盟の常任理事国というね、独立国であり、且つ、立派な社会的地位があったにも拘らず、あの戦争を通じてアメリカの植民地みたいになっちゃったと」

水島「うん」

鈴木「そうするとアジア・アフリカ諸国の植民地だった方々を独立させてあげてね、で、日本は独立国だったのに植民地になっちゃった。これは何ともねえ、その崇高な事をしたという気はあるんだけど、何とも割の合わない、つまんない結果だなあという風な、

ですねえ（笑）複雑な思いが錯綜しているというのが、私の実際の心ですよ」

水島「実際、おっしゃるように、我々もね、一番、疑問なのは、あそこまで、しっかりと拳国一致で来て、一種の戦時共産主義的な形で配給から何からやって、共産党員達が大量に転向して、大東亜戦争に参加したという風になっているにも拘らず、終わった途端、占領軍が来たら、ごろんと朝日新聞から何から、みんな、GHQの、ここまで転換出来たのは、何だろうっていうことが、やっぱり私なんかは江藤淳さんが色々『閉ざされた言語空間』だったかな、あれを読んで、こういう構造なんだということですけど、敢えて例として、名前を挙げると、読売新聞のナベツネさんっていう方ですね」

鈴木「はいはい」

水島「非常に力を持った編集委員でもあったし、主筆でもあった。あの方が流れたのは、東大新人会に居て、ある種の共産主義者から変わってGHQ、正力さんの中で、あの読売新聞の中で力を持って、それから、あれは完全に敗戦利得者新聞ですから、こういう中で保守的な言論をずうっとリードして、あの左翼だったねえ、何ですか、あの人は。女性で、あの優しい保守の言論人は誰でしたっけ、あの女の人は」

三浦「櫻井よしこさん」

水島「ああ、櫻井さんは、もうナベツネさんの薫陶を受けて、ド左翼から転向した人。本当に私は覚えていますけど、キャスターをやっていた頃は、本当に左翼だったですよ。それが立派に、立派にって言うか、実際は、あまり立派だと思っていないですけど。こうやって保守になっていく。

でも、そのナベツネさんが歳をとってきたら、また先祖返りして極めてリベラルに変わって行くっていう姿を見るとね。その近代主義イデオロギーでやった人達が、ある場合には凄く保守系になるとか、右と左って、私はあまり信用できなくなっているっていうのは、そこのところがありましてね。

ここまで80年、先程、矢野さんが言ってくれたように日本人がゴロっと変わってしまって80年、戦後40年、40年でね、本当にこんなに変わるものなのかという、これは、やっぱり、それで明治維新から、その辺のスタートで色々問題があったんじゃないかみたいな気がしているところがあったんですけどね」

鈴木「あのう、私の個人的な話をしますと、今から40年前ぐらいの壮年期ですけど、伝来の親友から絶交を宣言されたことがあるんですよ」

水島「おお…」

鈴木「この方はね、岩盤保守の人ですよ。それでね、40年前だけど、我が国は、憲法九条を改正して自立した国になるべきだと、私が言ったんですよ。そうしたら、彼はね、激しく反発して、彼はこう言ったんですよ。310万人もの無駄死にをさせた上に、国を失った、それで過ちを犯した日本人の戦争指導者は、外国には謝っているけど、日本人の犠牲者に何ら謝罪する事無く来ていると。それで、戦後も、のうのうと権力の中枢に座っていると。

だから、こんなことでね、軍隊を持ったら、また同じような愚かな戦争を始めて、俺達はその第二の無駄死にを強いられて、第二の敗戦を味わうだけ。軍隊を持つべきだなんていうね、君の言葉は一切、聞きたくないっ、バァ〜ンツ！と絶交を宣言されてね、それで、絶交された訳ですけども、彼が左翼の人なら別に何てこと無いんですけどね、やはり岩盤保守の人な訳ですよ。だから、そうすると…」

水島「そのう、のうのうと生きているというのは、どういう連中のことを言っているんですか」

鈴木「いや、そんなこと、どうなのこうなのなんか聞けませんよ。もう、バンツ絶交宣言

ですから（苦笑）、どうなのこうなのを言う訳にはいかないんだけども」

水島「なるほどね」

鈴木「う～ん、それでね、だから彼の親類縁者とか何かが、あの戦争で何かあったかもしれないけど、それは僕には判らないと」

水島「うん」

鈴木「だから、その310万人の戦没者の傷っているのは、今も何か残っていてね」

水島「はい」

鈴木「所謂、岩盤保守と言われている方の中にも、少なからぬ隠れ護憲派というのが居るんじゃないかなあというような感じをもっているんですね」

水島「だから、それは、さっきナベツネさんの話を敢えてね、失礼ながら、お亡くなりになった方ですけど、大変、有力な人だったんでね、そういう人がそうじゃないかなあっていう気がしますけどね。いざとなると、そこが来るみたいなね」

鈴木「う～ん…」

水島「というのは敗戦利得者の人達は、自己肯定しなきゃいけない」

鈴木「うん」

水島「戦前を否定して、今ある自分達を肯定しなきゃいけないっていうのがあるから、余計、今ある自分を否定されるとね、戦後保守っていう形で一応、存在感を持っていたから余計に嫌がるんじゃないですかね。うん、私は今、戦後保守批判っていうことで、凄く嫌がられていますから」

鈴木「う～ん…」

水島「ええ。まあ、我々は、そういうところを、もうちょっと正直にやっていかないと拙いっていう気がするんですけど、やっぱりトランプ政権とかウクライナ戦争っていうのは結構、そういうのもね、示してくれたんじゃないかなあと思うんですけど、どうですか、矢野さん」

矢野「私は思想の闘いっていうのが本質だと思うんですけども、或いは、宗教の闘いかもしれないんですが、根本的には西洋列強、これはユダヤのグローバリズムも同じですけども、一神教の選民思想だと」

水島「うん」

矢野「それが中世以降、段々と形骸化して行って、それで啓蒙思想以降、理性万能論になって、最終的には唯物論、無神論になっていったという、西洋の思想的流れがあると思う訳ですけども、日本はそれに翻弄されて来たんじゃないかと」

水島「うん、そうですね」

矢野「それで安土桃山時代に一時、キリスト教が入って来ましたが、あの時代のキリスト教というのは未だキリスト教自身が非常に生命力を持っていた時代だと思うんですが、その幕末の頃に入って来た段階では、西洋列強の思想自体が変質をしていて、純然たるキリスト教ではなくって、所謂、啓蒙思想とか、それからフランス革命を経た時代の思想だったと。ある意味、そういう西洋自体が思想的混乱の最中にある時に、日本と文明の接触と言うか、始まった訳で、それがあある意味で、日本のその後の近現代史を非常に混乱させてきたと思うんですね。

それで、私は今、水島社長が指摘されたように、何故、こんなに簡単に戦後日本が、日本人が変わったんだということについては、もう幕末の頃から流れがあって、山縣などが、この『軍人勅諭』等を考える時に一番、排斥しようとしたのは何かって言うと、自由民権思想ですね。自由民権運動です。自由民権という考え方自体が既に、西洋流の一種の人権思想が入って来ている訳ですよ。

これは日本流の、例えば、その後の『教育勅語』でもそうですけれども、人間関係を主に考える、そういう自我というものを表に出すんじゃなくって、正に道元の言葉にもありますけれども、自己を運びて、その萬法を修証するのは迷いだと。萬法がすすんで、自己を修証するのが本当の悟りだと言っているんですけど、所謂、デカルトの「我思う、ゆえに我あり」というのとは、また逆なんですよ

水島「うん」

矢野「まず自然があり、環境があり、親が居て、その恵みの中で自分が生まれて来て育てられると。そこに命っていうものの自覚が生まれて来るという、そういう日本人の伝統的な価値観、生き方に対して、西洋の考え方っていうのは自我中心主義だと。海外なんかでもそうですけれども、要するに自己を中心に考える。だから、まず自分があって、そのうち世界があるんだと。それで、自己たらしめるものは神だと、唯一、絶対神だという発想なので、結局、自我の絶対化、エゴイズムの絶対化という契機がそもそも一神教の中にはあると。

これは正に、選民思想が一つの証だと思うんですけども、それが異民族に対する勢力戦争になり、植民地化になり、近代以降の植民地の世界の中で、西洋同士では、やれ人権だ、自由だ、平等だと言いながら、植民地体制下で1億人の有色人種を殺して来た。お互いに自分達の内輪でも内戦だ、革命だということで、戦争以外で1億人も殺し合っている訳です」

水島「うん」

矢野「これが西洋列強の実体であり、彼らが言っている自由とか人権とか民主というものをやってきたことな訳ですよ。それを知らずに戦前の、特に日本というのは、大正時代のデモクラシーとか教養主義の流れの中で、どんどん、そういう思想に染まって行ったと。

特に旧制高校とか、そういう所で深く静かに、こういう西洋流の自己中心主義を背景とした当時、もうロシア革命も起こってましたから、プロレタリアル文学とか、そういう流れもあって、インテリ層に、それが既に浸透していたと思うんですね。一部、軍の中にもそれも入っていたと思う。そういう素地があったから、敗戦後、その重しが外れて表に出て来たに過ぎないと」

水島「うん」

矢野「だから当時、この敗戦利得者、先程、言われた人達の世代はどうかと言うと、明治末期ぐらいから大正にかけて青春時代を過ごした人達で、その時代に既に西洋の唯物主義とか、或いは、自我中心思想、そういうものに、ある意味、憧れたり個人主義というものに憧れたり、そういう世代の人達が結局、戦後の日本の転換の、むしろ担い手になって、迎合したと。

それが占領軍の今の憲法でもそうですけれども、基本的に他国に依存するという隷従的な日本を正当化する、そういったイデオロギーって言うか担い手になって、言論界とか思想、教育とか法制とか、そういう全てを牛耳って来た。それが、更に中枢部まで浸透してきて、政治や官僚界、経済界まで全部、そういう流れに染まってしまったんですけども、今、一番、重要なことは、そういう行きつくところまで行ってしまったんですが、共産主義もグローバリズムの一派に過ぎないと、私は思うんですけども、あからさまな暴力革命、それから現在の共産主義は、もっとスマートな文化共産主義ですけども、形態は変えているけども、最終的に彼らが目指している世界は、エリートによる世界支配という構造は変わらない。そういうものがイデオロギーとして形骸化をして、生命力を失っている」と

水島「うん」

矢野「今、唯一残っている巨大な共産主義国家の中国でさえ、それは、もう形骸化している訳ですよ。そういうイデオロギーとしての力を失って、形骸化している時代が40年間、ずうっと進行して来て日本自身も無気力におかれたけれども、同時に共産主義思想や、グローバリズムも生命力を失ったと」

水島「うん」

矢野「それが、ついに途絶えたのがバイデンの終わりで、それを、きっかけになったのはウクライナ戦争だと思うんですけども、ここで大きく時代が転換して、この形骸化してゾンビになった共産主義思想やグローバリズムに変わって、新しいナショナルな時代がもう目の前に来ている訳ですよ」

水島「そうですね」

矢野「だから、そのナショナルなものを一体、何かということをも日本人自身が日本として見出す必要があるということです。だから、最初に申し上げたように、この江戸時代以前に戻る必要があると。或いは、記紀・万葉迄、戻る必要があるんじゃないかということですね。

それで、私は唯物主義とか、それから西洋流の人権思想とか、我々が戦後、正しいと信じ込まされた人類普遍の原理という民主とか人権とか、自由という価値観自体が、もう意味を失っているんだと」

水島「うん」

矢野「西洋でさえ、欧米でさえ、それはもう形骸化してしまっているんだ。だから我々の言葉で、我々の概念で伝統的な価値観に基づいて、もう一度、見直すと。憲法もそういう精神で替えるというぐらいやらなきゃ駄目だという風に思います」

水島「そうですね。はい。今言ったことで先程、そういうお話になったんですけど、その原点になった映像が、先程、間が抜けちゃっていたので、すみませんが、今、急遽、編集したと言うので、東京裁判のブレークニー弁護士の部分などがそういうのが入っていると思いますので、是非、そのフィルムをご覧戴きたいと思います。これは非常に大事だと思います。色んなところではやっていませんので、ご覧下さい。どうぞ」

## <ビデオ開始>

### 法廷第1日

土肥原賢二 陸軍大将 奉天特務機関長・奉天市長

通訳「土肥原賢二、貴方は有罪を申し立てますか。無罪を申し立てますか」

土肥原「無罪を申し立てます」

広田弘毅 総理大臣・外務大臣

通訳「広田弘毅、貴方は有罪を申し立てますか。それとも無罪を申し立てますか」

広田「無罪」

板垣征四郎 陸軍大将 関東軍参謀・陸軍大臣

通訳「板垣征四郎、貴方は有罪を申し立てますか、それとも無罪を申し立てますか」

板垣「無罪」

木村兵太郎 陸軍大将 陸軍次官・ビルマ方面軍司令官

通訳「木村兵太郎、貴方は有罪を申し立てますか、それとも無罪を申し立てますか」

木村「無罪を申し立てます」

松井石根 陸軍大将 中支那方面軍司令官

通訳「松井石根、貴方は有罪を申し立てますか、それとも無罪を申し立てますか」

松井「無罪を申し立てます」

武藤章 陸軍大将 軍務局長。フィリピン方面軍参謀長

通訳「武藤章、貴方は有罪を申し立てますか、それとも無罪を申し立てますか」

武藤「無罪」

東条英機 陸軍大将 総理大臣・陸軍

通訳「東条英機、貴方は有罪を申し立てますか、それとも無罪を申し立てますか」

東条「起訴の全部に対しまして、私は無罪を主張いたします」

全ての被告が無罪を主張し

日米の弁護団は、被告の無罪だけではなく

東京裁判自体の不当性も主張した。

被告側弁護人 清瀬一郎

清瀬「当裁判所においては平和に対する罪、また、人道に対する罪につき、お裁きになる権限が無いということであります」

清瀬「命令1号、または20号の2条 A及びC、即ち、平和に関する犯罪、人道に対する犯罪がポツダム宣言以外のものであり、マッカーサー元帥の持つておられる権限で発布されたとするならば、日本国民は、これに従う義務はないのです」

清瀬弁護人は、トルーマン米大統領の東京裁判についての言葉を引用した。

『世界の歴史が始まって以来、初めて戦争製造者を罰する裁判がおこなわれつつある』

清瀬「武器を捨てた兵隊は、家庭に於いて平和なる生活を営む為に、郷里に帰してやろうという条件が付いている。もし連合国の一存で、その条件を履行しなかったならば、これはポツダム宣言の違反であります」

トルーマン大統領の言葉は

戦争後に作られた『事後法』で

被告を裁く不当な裁判であると主張した。

弁護団による東京裁判の不当性の訴え

通訳「降伏後、トルーマン大統領が言ったということは、本件について何らの関係が無い」

清瀬「裁判長は、内容をお読みになったでありませんか」

裁判長「討論は本件を持って終結いたします。誰も、これ以上は…」

清瀬「トルーマン大統領は…」

裁判長「冷静に！あなたの反論に新事実はありません。問題は新事実です。我々の決議は後日に留保します。文書による動議と一部被告の名前が明朝9時30分に提出されます。明朝9時30分まで休廷と致します」

通訳「討論は本件を以て終結いたします。明朝9時30分、裁判所は開廷致します」

通訳「閉廷」

## 極東国際軍事裁判所

アメリカ人弁護団も、戦争の合法性を主張し、東京裁判の不当を訴えた。

被告側弁護人 B. ブレークニー

ブレークニー「戦争での殺人は罪にならない。それは殺人罪では無い。戦争は合法的だからです。つまり合法的な人殺しなのです。殺人行為の正当化です。たとえ嫌悪すべき行為でも犯罪としての責任は問われなかったのです。キッド提督の死が真珠湾爆撃による大罪ならば、我々は広島に原爆を投下した者の名前を挙げる事が出来る。投下を計画した参謀長の名前も承知している。その国の元首の名前も、我々は承知している。彼らは殺人罪を意識していたか。してはいない。我々もそう思う。それは彼らの戦闘行為が正義で敵の行為が不正義だからではなく、戦争自体が犯罪ではないからである。何の罪科で、いかなる証拠で戦争による殺人が違法なのか。原爆を投下した者がいる！この投下を計画し、その実行を命じ、それを黙認した者がいる！その人達が裁いているのだ！」

ブレークニーのこの弁論は通訳無しとして裁判速記録には記載されてない。

しかし日米弁護人の裁判管轄権に対する

真正面からの意義に対して

ウェブ裁判長は5月17日

言葉少なに却下を申し渡した。

理由は将来宣告するとして

明らかにされず、休廷となった。

こうして、この裁判の成立に関する

大きな疑問は、解かれることなく終わった。

## 南京事件に関する法廷

### 松井石根大将の尋問

通訳「しかし、第10軍、及び上海派遣軍は、貴方の指揮下にあったというのは事実ではありませんか。どうぞ」

松井「指揮下にあったことは事実です」

通訳「さて、貴方は宣誓供述書の第9ページの中に於いて一部の青年、航空士の若干の将兵の間に、暴行を、南京で行ったものが在りたるならんと言っております」

通訳「これらの件に関する報告を、貴方は誰から受けましたか」

松井「えー、憲兵隊」

重要な証言部分になると  
フィルムが必ず途切れた。

通訳「彼は特定の、ある部隊であるとか、ある師団であるとか、ある軍であるとかいうものの名前を挙げましたか？」

東京裁判の記録フィルムは  
アメリカ国立公文書記録管理局に保管されている。

私たちは4度にわたって渡米し  
南京戦に関する松井証言のフィルム提供を要求した。

しかし、そのつど記録管理局は  
フィルムが存在しないと提供を拒否し  
購入出来た松井証言には  
大事な部分がほとんどなかった。

このような重要な記録フィルムが  
消去されるはずはなく  
南京の真実が明らかにされることを  
恐れた結果だと思われる。

結局、松井大将が『南京大虐殺』を  
完全に否定している証言フィルムは、  
未だ公開されていない。

極東国際軍事裁判所  
昭和二十三年十一月十二日  
極東国際軍事裁判（東京裁判）判決日

## ウィリアム・ウェブ裁判長

「極東国際軍事法廷は、裁判所条例第十五条に従って、  
有罪の判決を受けた被告に対し刑を宣告する。

被告 土肥原賢二、絞首刑。被告 広田弘毅 絞首刑。被告 板垣征四郎 絞首刑。被告  
木村兵太郎 絞首刑。被告 松井石根…」・

<ビデオ終了>

水島「はい。判決の所は先程、観て戴いたので省きましたけど、大事なのは、やっぱり、  
弁護人の方から、所謂、平和に対する罪とか人道に対する罪っていうのは事後法だと。あ  
とから決めたもので、戦争前にはそんなものは無かったのに、まあ、ニュルンベルグ裁判  
もそうだったんですけれども、こういうものを、そのまま適用してこっちへ持って来た。  
こういう形で人道に対する罪、平和に対する罪っていうのが、ここで何の説明も無いまま  
判決が下されてしまったということであります。

それとブレークニー弁護士が言っていたように、原爆を落とした奴とか、戦争というのは  
人殺しの行為だから、その中で起こったことについては罪を問われないんじゃないかとい  
うことに対しても、説明が無かった。結局、今、トランプ大統領が言ったように、この  
間、広島・長崎に落としたのは平和を守る為だった。平和をつくる為だったというような  
形の論理が、この段階から続いているっていうね、我々は、そのことも見ておかなきゃ  
いけないという風に思います。

こういうことを、本当に繰り返し、これは、もし、ずうっと何十年前からメディアが東京  
裁判について、こういうブレークニーというアメリカ人弁護士が、これだけのことを言っ  
ていたということが伝わっていれば、全然違ったと思いますけれども、鈴木さんがさっき  
おっしゃっていた敗戦利得者という人達は、一切このことを伝えなかった。

それから途中でバツと切れていましたけど、あれは実際、うしろにあるんですよ。あるの  
にも拘らず大事な所は全部、未だ他にも、我々は別の所で使っているんですけど、例え  
ば、さっき言ったように人定質問みたいなところしか撮らない。松井大将は、そういう二  
人だか何人か、そういうことをしたとか、実際はやっていなかったんですけど、容疑があ  
ったので、そいつは実際、処刑されているんです。殆ど無いんです。レイプ事件なんてい  
うのはゼロですよ。それだけ敵国の首都を陥落させた名誉ある大変な戦なんだから、絶対  
に不祥事があっちゃいけないというぐらい厳しくて、生き残って南京戦を戦った人達11  
人、もう皆さん、亡くなっていますけど、インタビューを残してありますけど、そう言っ  
ているんです。松井大将は厳しかったから、そんなこと出来る状況じゃないと。それか  
ら、どんどん入れ替わっていったから、将校ですら避難区に入れなかったと。避難民が2  
0万人居た所には入れなかったっていうことは、もう間違いないですけども、こういう形  
で、情報が全部、押さえられている。

もう80年間、これが未だオープンされないまま、米国の中にあるんですね。それから処  
刑シーンもあるんですけど、私は1ミリも違わず、処刑場と全く同じものを造りなさい  
と。1ミリも間違えないように処刑場を造らせたんですけど、結構、お金もかかったん  
ですけども、実際には、実はカメラがあって、その7名の方の2回に渡る処刑が行われたん  
ですけども、これも今の上皇陛下のお誕生日に行われたというね。12月ですけども、  
こういうことも含めて非常に情報がね、この問題についてはダブーにされて来た。  
今、このことをお話していますけど、だから、こういう映画を作って日本全国で100か  
所ぐらい上映しましたけど、12~3年前ですか、第1部は、もうちょっと前かな。上映

会をしましたけど、やっぱり駄目だった。メディアでも何も取り挙げられないようになっている。

第二作目も、やっぱり中国共産党の陰謀みたいなものを全部、暴いたんですけど、これも駄目になっている。第三回も、また造りますけどね。YouTubeとか、そういうところでは出来ない状態になっています。だから、本当に閉ざされた言語、言論空間って言うかね、これがまだまだ続いているってことです。インターネットの中でも続いているっていう事を、改めて皆さんに知って戴きたいなと思いました。はい。元に戻しますけど、三浦さんは、こういうのを御覧になって、勿論、知っていると思いますけど」

三浦「ある程度は知っていますけれども、まあ、そうですね、この問題は、水島さん達がずっとやって来られたことなので、私が、屋上屋を架すようなことを言う立場ではないと思います。だから、さっきからテーマで、一つね、ちょっと自分も正直なことを言いますが、私が生まれたのが昭和35年ですね。1960年です。もし、私が10年早く生まれていたら、バリバリの左翼だったと思いますよ」

水島「うん」

三浦「うん。今、保守って言っている人で似たようなのが結構、居るんじゃないかなと、俺は思っています（笑）」

鈴木「その通り。その通りです」

三浦「ええ。それは別に僕は露悪的にこういうことを言いたいんじゃないで、やっぱり、左翼思想、先程から日本というものの良きところを否定してきた西洋近代というお話が中心で、僕もそういう話を言っていますけれども、やはり明治の文学とかを読めば、西洋近代というものに対する強い反発と共に、物凄い感動と両方がある訳ですよ。それは、それだけの力を、やっぱり近代っていうものが魅力と共に持っていたということは、やっぱり認めた方がいいと、僕は思います。

ただ、その時に、日本というものを失わないで近代と格闘した人と、日本というものを完璧に捨てちゃって近代に同化しちゃった人との差は、やっぱりある訳です。明治の人達は全部とは言いませんけれども、やっぱり日本っていうものと近代との間に非常に身悶えがあったんですね。それは大正時代には、私が大正に生まれた訳じゃないので、また人の権威を借りるようで悪いんだけど、林房雄さん自身は、あの方が大正に青春時代を送って、あの方は自分は素直にマルキストになったって言っているんですよ。あの方は、自然主義文学、つまり日本の伝統というものとか歴史というものを日本だけじゃない、人間の歴史とか伝統というものを、むしろ否定して行って、人間のエゴイズムであるとか、悪く言えばエゴイズム、良く言えば人間の自我というものを物凄く大切にする。

そして人間っていうのは、一步、誤れば獣なんだって、そういう一面が確かにあります。そういったことをリアルに写し出していく文学っていうものに凄く憧れて、やはり、そこからマルクシズムっていうものに一直線に行ったと。これは正直に言っていると思いますよね。それで何故、林さんの青春時代の文章とかを読むと、本当に現代と一緒にだと思えますね。祝詞とか退屈でしょうがなかったし、日本の古典なんて読もうとも思わなかった。読んでも字づらを追えるけど、理解出来なかった。これは露悪的に言っているんじゃないで、本当に近代って、そういう空間を創ると思いますね。私もそういうところで育ちましたから。だから今、たまたま保守的な思想というものの強い時代が復興した時代に生まれたから、私はこういう立場になっているので、10年早かったら、バリバリ左翼だと思えます。

だから、それぐらい、やっぱり戦後の日本、敢えて戦後に限りますけど、そういう危うい競争を全て失った時代に生きているって言うことは、やっぱり自覚した方がいいだろうと

思うし、それを敢えて言うと、明治から始まっているんだと思いますね。僕の意見なんて対して価値ないので、さっきジェイソン・モーガンさんが凄く大切なことを言われたと思うので、モーガンさんの言っている事を、もし僕が誤解していたら否定して欲しいんですけど、さっき『和魂洋才』は成り立たない危険な概念だっていうことをおっしゃいましたが、これ、凄く本質的な事を言っておられると思います。

例えば、中国の大陸の法制度だけを持って来るっていう、これ、制度ですから、日本の中で調和するっていうことが出来る。だけど『和魂洋才』の考え方っていうのは、日本の伝統的な精神は守った上で西洋の科学技術だけを、大雑把に言いますよ、取り入れようって考え方。だけど、これに対して、先程、モーガンさんのおっしゃった九州の、むしろ神風連とか、そういう攘夷派の人達っていうのは、そんなに器用なことは出来る訳が無いだろうと。

もしかしたら、吉野先生の範疇かもしれませんが、西洋の科学技術っていうのは西洋の思想と一体のものなんだから、技術だけを切り離して日本に輸入出来る訳が無いって。輸入すれば必ず西洋の価値観で、和魂というものは浸食されてくっていう宿命があるんだと。で、勿論、そんな理論的には言っていないんですが（笑）、そういう背景があって、私は西洋がおかしいって言っているんじゃないで、それぐらい西洋近代っていうのは、一方で非常に魅力的ではあるけど、一方では非常に危険なものだっていうことに対する自覚っていうものが、明治時代の心ある人にはあったけれども、さっきモーガンさんが言った中央政府っていうか、とにかく、さっき僕が言ったことと矛盾するんですけどね、日本を西洋近代のように強くしなきゃいけないという、それに中心になった人達は屡々それを忘れて、日本の和魂っていうものを捨てて近代化する事を選んでしまったと。

それに対して近代化は仕方ないんだけど、まあ、仕方ないと思わなかった人も居るけど、常に反近代の側からノーを言い続けたのが、モーガンさんのおっしゃる地方の志ある人達だったと。それは、特に九州がそうだったんでしょけど、そういう日本近代っていうのは、そういう近代化に邁進する中央と、近代化に抵抗する人達とのせめぎ合いの歴史だったということ、多分、モーガンさんが今、おっしゃりたくて、それは恐らくアメリカに於ける南部と北部の関係とも恐らくパラレルだと思いますが、今、非常に重要なことをおっしゃったと思うので、間違っていたら訂正してくれていいんですが、私なりに受け止めた事を言わせて戴きました」

水島「モーガンさん、今の三浦さんの話はどうですか」

モーガン「はい。今、三浦先生がおっしゃった通りですね。正に、私が言いたかったことです。一点。一点だけ自由民権運動について、ちょっといいですか」

水島「はい、どうぞ」

モーガン「先程、矢野先生がおっしゃったことに、私は同感で、自由民権運動は、例えば、誰を選んでもルソーの影響とか、エマーソンの影響とか、そういった西洋の思想者の影響が強いと思いますが、私も、ずっと前まで自由民権運動は、あまり良くないと思っていました。九州に行って研究会に参加したら、具体的に、この浦辺登先生がお書きになった『玄洋社とは何者か』って」

水島「はい」

モーガン「詳しく説明が入っているんですけども、ちょっと違うと思ったのは、私の理解がちょっと間違っていたとも思ったのは、例えば、宮崎滔天とかそういった人々は、そもそもロマンチストと言いますか、そういった考え方があって、それで海外の思想に出会って、それが刺激になる」

水島「うん」

モーガン「もうちょっと深掘りすれば、例えば、洗礼を受けて、実際にキリスト教は何ものかと、もうちょっと詳しく知ったら、それを棄教したということは、自由民権運動は、そもそも日本人ベースで魂を打っていない。でも中央政府に入る人間は逆に、どっぷり、西洋思想に浸かって、妥協するとか、妥協せざるを得ないとか、例えば伊藤博文とか板垣退助が途中で中央政府に入ると、ちょっと妥協するようになったじゃないですか。でも、西郷隆盛とか、そういったロマンチストっていうか強い日本人、九州の方々はいくら西洋の思想が入っていると言っても、やっぱり和魂がメインだったなあと思っています。でも、先程、映像を観て、広島・長崎の原爆投下あとの映像で、焼かれた赤ちゃんの遺体とかを観て、西洋思想は癌細胞だなと改めて思いました。そういうことができるのは、西洋人だなあと」

水島「なるほどね」

モーガン「平気で赤ちゃんを焼き殺すことが、西洋そのものだと思います。以上です」

水島「はい、有難うございます」

三浦「モーガンさんがおっしゃった自由民権運動っていうのは九州の、そういう自由民権運動というのは西南戦争から起きたものですよ」

水島「うん」

三浦「西郷隆盛がベースなので。西郷隆盛の、要するに明治維新から見た大東亜戦争ですけど、明治の近代化に対して、それが有効だったかは別として、抵抗した人達から起きた自由民権運動という…」

モーガン「そうです」

三浦「それから近代化を促進する中で起きた自由民権運動があって、これは言葉は一緒だけれども、かなり性格の違うものですよ」

水島「うん、そうですね」

三浦「それは浦辺先生が大専門家だから、私が言うことでは無いんですけど」

水島「はい。これは、ずうっと、よく大久保利通と西郷南洲の違い、対立の原因はそこにあるみたいなどころがあるのと、私はその戦後の中で本当に典型的に、所謂、戦後の知識人に対抗したのが、小林秀雄という人でね。ちょっと書物、論文は、覚えていないですけど、あの『利口な人は、たとえ反省するがいい』と。戦争が終わったあと『俺は馬鹿だから反省なんかしない』っていうね、この決意というか、この問題ですよ。だから転向の、本当にコロッと変わっていった日本人を見た時、小林秀雄が言った言葉、或いは、『花が美しいのではない』と、『美しい花があるんだ』っていうね。

この決意というか、つまりイデオロギーと実際の具体的なものの素晴らしさっていうね。この違いも非常に出しているっていうか。そのところは非常に、私は小林秀雄っていう人を非常に高く、もう心酔しているぐらいですけども、そういうような、しっかりとした近代っていうものに対する距離の置き方、或いは見方、もう一つ言うと『和魂洋才』っていうのがありますけど、もう一つあるじゃないですか。

『脱亜入欧』っていう言葉があるじゃないですか。これは福沢諭吉だったと思いますけどね」

モーガン「そうですね」

水島「こういったものも、その時代に沿った形のあれだったかも分からないけれども、本当にそうだったのかと。そうなのかということも考えなきゃいけないっていう気がするんですけど、そういう東京裁判を含めて、まだ片付かないことがめっちゃくちゃ今でも凄く多いということは分かるんですけど。吉野さんは、この問題について、どういう感じを持っていますか」

吉野「はい。今、三浦先生から10年前に生まれていたらバリバリ左翼だったっていう話がありましたけども、僕もそうですけど、生まれ育ったのが横浜なので、京都とか横浜ってバリバリ左翼の所なので、物凄くそういう教育を受けていましたから、私もバリバリ左翼でしたよ」

水島「うん」

吉野「昔の祝詞とか、或いは、古事記もそうですけど、面白くない訳ですよ。読んでいて意味が解らないし、最近、やっと面白くなったのは歳をとったからとか、保守が流行っているからじゃなくて、僕、キーワードは『大和言葉』だと思うんですね。大和言葉って、1音1義で全部、意味があるじゃないですか。例えば『あ』だったら始まるとかね、『い』だったら意味するとか『う』だったら生むとか、『え』だったら笑むとか、『お』だったら雄々しいとかね。

50音全部に意味がある言葉で、それが、例えば『ひがし』って言ったら、日の頭だから太陽が出るっていう意味ですよ。そういう言霊になって。それが例えば、あめのみなかぬしだったら『あ』は始まりですよ。あめの『め』は『ま』ですから纏まるですよ。

『の』はおぶでしょ、あまのみ、『み』は真ん中ですよ。『な』は、なるですよ。『ぬ』は終わる。『し』統一するっていう意味だから、そのまま読んだらビッグバンが始まり起きましたっていう意味になる訳ですよ。

宇宙の始まりが起きて、インフレーションが起きて統一される状態になりましたっていうのが、天の中の真ん中にある御主って、それに漢字をあてたら、それは読んじゃいますよね。でも古事記に書いてある通り、これは当て字ですよっていう注釈が書いてあるのに、それを知らないで僕達は習っちゃったから、平仮名と漢字が混ざっている訳の解らない文章で、全然、面白くねえやと思ったけども、ずうっと順番に見ていたら、神代の七代ぐらまでは、宇宙の始まりとか地球がどうやって出来たとか、日本列島がどうやって出来たっていうことが凄く書いてあって、その一文字一文字を一音一義で追って行き、言霊で読んで漢字も当てて、そして物語で見ると四つのことが同時に書いてあるということが判ったら、何て凄い人達だったんだというのに気付けたけど、これを読み言葉と書き言葉で消しちゃったじゃないですか」

水島「うん」

吉野「それから僕は凄く罪が重いのは、二葉亭四迷だと思うんですけど」

水島「うん」

吉野「所謂、書き言葉じゃなくて喋り言葉の小説を書こうってやったら多分、その時ね、凄くセンセーショナルだったと思うんですよ。コンビニ敬語みたいな感じで」

水島「(笑)」

吉野「それに憧れてしまった日本人が居て、それが、さっきの『和魂洋才』だとか『脱亜入欧』だとかっていうのと同じで、何か格好いいという風に思ってしまって、捨ててしまっていると。それを全部、終わって大和言葉も何も無い」

水島「うん」

吉野「書き言葉も全く習わないで、平仮名と漢字しか知らないっていう僕らが、昔のものを見たら意味が解らないから面白くなかっただけの話であって、ちゃんと古語を、書き言葉を小学校で習った戦前のようにしていたら、意味が解ったはずですよ。そこで、やっぱり左翼というのが格好いいという洗脳が始まる訳だから、もう一回ちゃんと大和言葉の意味だとか一音一義があるとかっていうことを知って、色んな古典を読むと、凄い事が書いてあるんだと、日本人って、どれだけ素晴らしかったんだと。量子力学的に宇宙が始まるようなことが書いてあって、化学ですよ。ケミストリーで元素が出来て、地球が凝り固ま

って豊雲野神（トヨクモノノカミ）じゃないけど、海が成ると。それから尊と神の意味が違うとかね…」

水島「うん」

吉野「そういうことっていうのを解れば、なあるほどっていう風になったはずだと。日本人が、やっぱり凄く格好いいって思う訳でしょ。僕らは、ここの部分を全部、消されてしまったんですよね」

水島「うん」

吉野「だから余計に懂れますよね。やっぱり和楽よりロックの方がいいとかね、そういう風になっちゃうし、名前も西洋風の名前を付けたりとかで、譲二とか付けたりするじゃないですか。山本譲二じゃないけど（失笑）、だから、僕は、これが最も酷い事で、ここを教えておかないと、どれだけ過去の方がいいとかって言ったって、意味が解らないものを読んで理解は出来ない訳だから」

水島「うん」

吉野「だから、これを読んで、もう一回、例えば万葉集を読んだりとか、俳句もそうですよね。その一音一義で読んだら物凄く奥深いものであって、たった五七五の中に、実は沢山の情報が詰められていて、そこに、ちゃんとリズムがあって音階があるということをやっているような、そんな文化とか文明度の高いのって日本人しかいないと。これを知らなければ、やっぱりビートルズの方がいいとかね」

水島「(笑)」

吉野「そうなっちゃいますよね」

水島「うん」

吉野「だから、僕は時代背景と言うよりは、やはりマッカーサーとかGHQとか凄い事をやりやがったなっていうのは、敵ながらあっぱれって言うか、日本人を馬鹿にして、日本の文化とか文明とか歴史を潰すには、言葉を奪うのが一番、早いんだということをやられちゃったんだと思うのと。それから、ちょっと話が戻りますけど、敗戦利得者ですよ。戦前もやっぱり既得権益者っていうのが居たはずですよ」

水島「うん」

吉野「この大東亜戦争っていうのは、安全保障とイデオロギーの戦争だと。途中でイデオロギーが強くなったから、日本は負けたんだっていうようなことになっているけど、どうも僕はそうは思えないですね」

水島「うん」

吉野「つまりイデオロギーを強く言う人間っていうのは、実は既得権益者ですよ」

水島「うん」

吉野「だから戦争をやっていることによって、その瞬間、金が儲かっている奴とか、自分の権力が増大する奴らが居た訳で、だから戦争が終わって、そいつらが、敗戦利得者に転向しただけだから、もう朝日新聞が典型じゃないですか。戦争を煽っておいて煽っておいて、煽っておいて、戦争が終わると今度は、共産主義や社会主義がいいとかって言うている彼らは、やっぱり既得権益者であって、既得権益者ほどイデオロギーを訴えるから物凄く気をつけなきゃいけないと」

水島「うん」

吉野「でもイデオロギーを、きちんと主張している人の中に、ちゃんと保守思想を持ったり愛国思想を持ったりとか祭祀の考え方を持っている人達も居るから、だから、僕は簡単だと思う。言っている事とやっていることが違う人間とか、言っていることが直ぐ変わる人間っていうのは、どれだけ正しいイデオロギーだとしても、そいつは偽物だと。だか

ら、やっぱり、ずう~っと同じことを一貫して言っている人間を、どうやって見定めるかっていうことが大事だと思うので、だから結局、既得権益者達っていうのは恥知らずな訳ですよ」

水島「そうだね」

吉野「うん。よく末代までの恥って言うじゃないですか。末代までって、多分、吉野家の末代って言ったら何代続くか判りませんよ。実は、僕は11代目ですけど、長男が居るから12代まで居るけど」

水島「うん」

吉野「もし、僕が言っている事とやっていることが違っていると、言っている事を途中で変えたら、息子の代まで恥ですよ。でも末代までの恥っていうのは、そんな発想じゃなくて50代先とか100代先の人達まで、ずうっと恥をかかせることだから、だから言っている事とやっている事とかを変えちゃいけないんだよ。一つの事をちゃんと理念とか、哲学を持っていたら、それを変えちゃいけないんだよということだったと思うんですよ。

でも何処々々の総理大臣とか、名前は言いませんけど、ころころ変わるでしょ、あの人は（苦笑）、だから本当に恥知らずだと思いますよ。だから、僕は恥知らずって保守じゃないと思いますね」

水島「うん。勿論、そうですよ」

吉野「うん、だから、この辺のところを、きっちり保守の人達が言わないと、だから途中で転向しているなんて言うのは、保守とか革新とか言う前に、日本人じゃないですよ」

水島「うん」

吉野「だからモーガンさんが日本人だなと思うのは、発想が日本人だからですね（笑）。でも日本人でも、国籍が日本人で顔が日本人で漢字の名前であったとしても、日本人じゃない奴が、いっぱい居ますよね」

水島「そうだね」

吉野「うん。僕はそう思いましたし、さっきの映像を観て、同じですよ。あんな赤ちゃんが黒焦げになっているのを見たら涙が出て来ましたが、でも、これを同じ日本人である敗戦利得者の人達は、ありだと思っているんだと思って、悲しいと同時に腹が立ちますね」

水島「うん」

吉野「そんな感じですけど」

水島「本当に、今の原爆の映像もそうだけど、つい、この間、アメリカから日本人は大変に大きな心を持って協力体制が出来たみたいだね、お前が言うかっていうね」

吉野「(笑)」

水島「そういうところが本当にあるんでね。それと、今、非常に大事なことをおっしゃって戴いたと思うのは、共通性のことですけど、言霊っていうのは、日本人は、少なくとも昔は『言霊』っていうのを信じていた。これは本当に言葉の中に力を持っているっていうね、呪術的なものもアミニズム的なものもあるんでしょうけど、例えば柿本人麻呂の歌で『東（ひんがし）の野（の）にかぎろひの立つ見えて（に、の）かへり見すれば（かえりにすれば）月（つき）かたぶきぬ（かたぶきぬ）』って、つまり、これを見て、単に向こうに月が傾いて、こっちに日が昇って来るっていう、でも、蕪村の『月は東に日は西に』というのと違って、これは、さっきの宇宙の話だけれども、古代の人から見たら太陽が昇る、それから月が傾いて落ちていく、その世界の時間と空間が、何故、人麻呂の歌が単に叙述をしているだけじゃなくて、この壮大な物凄い感覚を五七五七七の中に、これだけの

時間と空間が全部、入っているって、それこそ量子力学じゃないけどね。

我々の中の言葉、今、おっしゃった言霊と、もう一つは凄く相対性理論的な時空というのが日本人の中にあるのと、もう一つ、今日は未だ出ていないんで言いますと、どの世界の中でも万世一系っていうのは本当に続いている。これは中国何千年なんて言っても、易姓革命とかコロコロ変わって、あれは天の意に副わなくなったから変わった。天使だと言うけれども、我々の国は世界中で本当に唯一、オンリーですよ。一つの系がずっと続いているっていうことを含めて、言葉の中にそういう力を感じるという、こういういいものを全く子供達に伝えていないということですね。

この辺のことも本当に、私は東京裁判のことも含めて、よく断絶させられたっていうのは、だから敗戦利得者のものは前から続いていたっていうのは、私もそういう感じがしますね」

吉野「もっと言うと『神』という言葉があるじゃないですか」

水島「うん」

吉野「だから『かみ』を『神様』という言葉になったのが間違いで、それこそ、一音一義で言ったら、『か』って火ですからね。だからエネルギーという意味ですよ。『み』って、中身があるっていうことだから、そのエネルギーの状態が今、目の前で起こっている瞬間というのが一音一義の意味だから、だから、あめのみなかぬし（天之御中主）の神と言ったらビッグバンが起こっている瞬間だし、それから、例えば、うましあしかびひこじのかみ（宇摩志阿斯訶備比古遲神）を祀る特定の神社は浮嶋神社、高見神社、足神神社などが挙げられますとかっていうのもそうですけど、それを一音一語で全部、取って行くと明確に素粒子が固まって一つになった神だから、この最初の造化三神は、かくれたまひぬって書いてあるけれども一瞬にして終わった状態で、神様が隠れたって言うとか何か志村けんがやっている、とんでもない、私は神様だ、みたいな隠れた様なイメージじゃなくて、ある時は量子力学的なエネルギーの状態。ある時は物理学的なエネルギーの状態。ある時は、化学的なエネルギーの状態っていうのが今、そこにある状態っていうことを一音一義で言うと『かみ』と言っていたので、その超自然現象に対して、我々は凄い事だなということから、それに『様』をつけて『かみ様』って言っているのであって、擬人化されたヤハウエとかGODとかギリシャ神話に出てくるような神様とかじゃなくて、自然現象そのものを神と捉えて、これは我々が元々出来たものだから、これに敬語をつけて、かみ様と言っているのを、擬人化している神様というように置き換えられちゃって、だから、何故、神道に御神体っていうものがないとか偶像崇拜が無いかって言ったら、その現象のことを言っているからであって、だから、ここも、やはり僕達が間違えて教育されて来たところがあって、だから、僕は本当に、この大和言葉っていう言葉を、もう一度、学び直すこと自体が本当の保守になるんじゃないかなという風に思っていますけどね」

水島「実際、私が別の番組で色々言っているのは、今、おっしゃったように、所謂、禅、命っていうものの捉え方が、相対理論って言うより、素粒子理論みたいな物質をどんどん小さくしていくと、最後はエネルギーと差がなくなって量子になるという、あの感覚は、所謂、現象、命は現象であるけども、あるという、全く禅の基本的な考え方、哲学的な言い方、あまり哲学って言いたくないけども、そういうものと、中国の朱子学って言うか、こうやって、いかに生きるべきか、人間はこうあるべきというね。ShouldとかMustとか、こうあるべき姿を儒教っていうのは言っている。それから、もう一つ言うと、今言った禅の場合は、存在論として神道とくつつくんですよ」

吉野「(頷く)」

水島「全然、矛盾しないんですよ」

吉野「うん」

水島「つまり、最近、流行りで直ぐ縄文時代がいいから、みんな、縄文、縄文って直ぐ言い出しているけど、勿論、アイヌもそうだし、ものにやまなかに魂があるとかね、でも、今の吉野さんの言い方も私の言い方もそうだけど、実際は自分達もその一部だっていうね」

吉野「うん、そうですよ」

水島「だから、こう独り、個人があって世界、神があるとかじゃなくて、自分もその一部であるっていうね、だから、そういう感覚が日本人の中に凄くあるっていうことで、これが忘れられちゃっているっていうね」

吉野「ああ、その一神教の神みたいなイメージを、僕ら、植え付けさせられてしまっているの…」

水島「そうですね。それは凄く多いね」

吉野「だから靖國に行くんだと」

水島「うん」

吉野「靖國に行って神になるんだっていうのは、自分が現存する命は終わってしまうけども、自分の心っていう、そういう量子力学的な、本当にエネルギーですよ」

水島「世界になる」

吉野「そうそう、世界。世界になると」

水島「うん」

吉野「だから、それを柱というのに数えるのは『は』っていうのは八ですよ。末広がり沢山になるってね、『し』っていうのは統一するっていう意味で、『ら』っていうのは、周波数のことですよ。だから柱になって靖國に帰るっていうことは、神様の形をして、そこで宗教的に祀られているっていう意味じゃなくて、エネルギーの一つとなって、そこに存在するということだから、それは即ち祭祀の道ですよ。ずうっとご先祖様から命が繋がっているっていうことだから、でも、それが、やっぱりね、どうも宗教的に、天皇教みたいになっちゃっているのが、僕は凄く残念ですよ」

水島「そこが、やっぱり明治維新の問題でね」

吉野「うん」

水島「最初は、そのつもりじゃなかったでしょうけども、西洋近代化の中で、それこそ、今、矢野さんに指摘して貰ったように、対抗する意味でもね、そういうものを何かつくなきゃいけないという意識に行っちゃったのかも分からない。ただ、それは弱さですよ」

吉野「うん」

水島「我々の中のね」

吉野「はい」

水島「という気がしますけどね、久野さん、これはどうですか」

久野「はい。えーと、まあ、ちょっと先輩方がおっしゃったことを拾いながら申し上げると、私は別に自分が慶応ボーイの代表格だと言うつもりは無いですけど、一応、慶応出身者として申し上げますと『脱亜入欧』って、よく誤解されるんですけども、一般的に言われるのは明治18年3月16日の福沢諭吉が、うちの大学では先生とか付けなきゃ駄目ですけど、まあ、福沢諭吉が主催していた『時事新報』という新聞の社説で書いたことですが『脱亜』は言っているんですよ」

日本がちゃんと生き残る為には、清・朝鮮と適度に距離をおかなきゃいけないということで『脱亜』と言っているんですが、『入欧』とは言っていないですよ。だから『入欧』って

というのは、これはねえ、もう本当に慶応生どころか慶応の先生だって誤解しているんですけども、あとから、どっちかと言うと、彼は西洋かぶれだから、みたいなイメージづくりの為に、あとから付けられたものであって…」

水島「ああ、そういうことか」

久野「実際、例えば、慶応生で結構、『福翁自伝』とか『文明論之概略』って読まされる時が、ああ、でも読まされても覚えていない人が多いんだけど、私は結構、一生懸命、読んだんです。『文明論之概略』の緒言ね、一番、初めに書いてあるのも『我が国は2500年の～』云々かんぬんって、ちゃんと書いてあるんですよ。だから『日本書紀』を元にした思考を、ちゃんと…」

水島「ああ、そうですね。はい」

久野「福沢諭吉が必要で、単なる西洋かぶれじゃなかったという話をまず置きつつ、結局、さっきの話だと、近代化の時に、せめぎ合ったものというのが理想主義と現実主義だから、さっきモーガン先生がおっしゃった九州の自由民権運動っていうのが、やっぱり究極の理想主義ですよ。理想主義だけでも、それを、そのまま貫き通そうとしたら、どうしても、その当時の政府とか、更には世界と軋轢が起きるから、妥協しながら現実の方に収斂していくと。その現実の方で言うと、例えば、自由民権運動の一形態として、議会を創る。議会を創る為に憲法をつくるという、西洋風のこともしなきゃいけない。これが板垣退助ですよ。

だから、そういう意味で、ただ板垣退助が別に反乱者みたいな感じで、抵抗勢力として自由民権運動をやっていたんじゃないで、むしろ憲法を作れ、議会を創れと言ったのが実現した訳だから、結局、その担い手でもあったということは、もうちょっと意識してもいいのかなと言うところがあって、その現実主義と理想主義、明治時代に入る時に、そのせめぎ合いを一番、この『和洋折衷』と言いますかね、それに腐心為さったのが、正に明治天皇じゃないですか。さっきの続きみたいな感じですけど、これをご紹介しておきたいですね。はい。

それこそ今、政治家が盆踊りに行くことの是非とかがツイッター、X上で炎上していますけれども、皆さん、一宮巡りとかしたことがありますかね。一宮巡りって、別に神社好きの人が浮ついてやるとかいうだけじゃなくて、結構、ちゃんとした意味があるんですよ。つまり、一宮っていうのは、その国、昔で言う『やましろのくに』とか『大和の国』とかで、やっぱり一番、崇敬されている、皇室からも朝廷からも崇敬されている、国の中で一番崇敬されている神社な訳ですが、例えば第50代の桓武天皇は平安京に都を移す時に、やましろのくに、一宮の、今で言う上賀茂、下賀茂神社ですね。

だから、当時、賀茂社に、やはり御親拝されて、自ら参拝なさって都に着くことを報告なさっている訳ですよ。それにならって明治天皇も明治元年に、東京に移して来られます。だから江戸城だった所が皇居になって、その東の宮、これが東京という名前も出来る訳ですが、それが武蔵の国に移って来るということなので、武蔵の国の一宮、つまり今の東宮の氷川神社に自らご参拝なさって祭典まで行っているんですよ。その上で、こういう勅書をお出しになりました。ちょっとサラサラっと読みますね。

『勅ス、神祇ヲ崇メ、祭祀ヲ重ズルハ、皇国ノ大典ニシテ政教ノ基本ナリ。然ルニ中世以降、政道漸ク衰エテ、祀典挙ラズ。遂ニ綱紀ノ不振ヲ馴致セリ。朕深ク之ヲ慨ク。方今更始ノ秋、新ニ東京ヲ置キ、親臨シテ政ヲ視将ニ先ズ祀典ヲ興シ、綱紀ヲ張り、以テ祭政一致ノ道ヲ復サントス。乃チ武蔵国大宮駅、氷川神社ヲ以テ当国ノ鎮守ト為シ、親幸シテ之ヲ祭ル。自今以後歳ゴトニ奉幣使ヲ遣シ以テ永例ト為サン。明治元年戊辰十月』

戊辰戦争の時ですかね。文中に出ていた大宮駅って、別に今みたいなJRの駅があった訳

じゃなくて、馬を乗り換える場所とかですね。大宮駅。この勅書ですが、どういうことかという、結局、お祀り事、まあ、日本では元々は祭政一致ですから、正に祭政一致の詔と言われている訳ですけども、政治を行う時に、やっぱり祭祀、お祀りを、ちゃんと重ね合わせてやっていかなきゃいけないのは基本ですけども、結局、鎌倉、室町、江戸と仏教自体が悪いということじゃないんですが、やはり神道自体が色々衰えた結果、政治も色々、悪い方向に行ってしまったから、王政復古、まあ、今の教科書では明治維新と言われるタイミングで、やっぱり、それを取り戻そうと言っている訳ですね。

その為に東京に都を移して、神道を復興する事を明治天皇自らが率先してやりますと。

で、その時に、そこから千年前の例に倣って、一宮にも、ちゃんと参拝して、しかも、大宮氷川神社、これは丁度、私の誕生日、8月1日が例祭ですけども、今でも勅使が使われる訳ですね。そういう風にちゃんと祭祀を復興するのが明治維新なんだということをお示しになった。結局、明治天皇が、これで、それをお示しになったんですが、さて、じゃあ、そのあとの日本が、ということですよ。

さっきの話で言うと、それこそ、社長が山本常朝の話をなさいましたけれども、あれですね…」

水島「葉隠れね」

久野「はい、葉隠れの。その佐賀藩というのもご存じの通り、実は幕末は日本で最も科学技術が進んだ所でしたよね。今、三重津海軍所跡っていう所が残っていますけども。初めてドライドック（乾船渠）を造って、初の実用蒸気船を建造した。更には、ワクチンを初めて打ったのはエドワード・ジェンナー（Edward Jenner）という人で、牛痘ワクチンを開発した人が自分の子供だと偽って他人の子供に打った訳ですけども、佐賀藩の藩主は、鍋島直正公がかけがえのない自分のお世継ぎの直大（淳一郎）公、次のお殿様に打った訳ですよ。

だから、それぐらい日本型のノーブレスオブリージュ的なところも発揮しながら、しかし西洋文明も何とか取り入れていかなきゃいけないと。これは幕末の志士達を沢山、育てた佐久間象山ですね。佐久間象山が政権録の中で、結局、訳して言うと、日本精神は大事なんだけれども、西洋の技術とかを取り入れて国を富ませないといけないんだっていうことを言って、でも、そこだけを、やっぱり曲解した人に襲われて、結局、命を落とすということで、この理想主義者から見た現実主義というのが、やはり批判の対象になる中で、それでも理想も解った上で現実を追い求めたっていう、せめぎ合いが幕末維新だった。

今はどうかと言うと、現実主義は現実主義で大事ですけども、理想主義というのは解り易く言えば、そもそも、どうだったのかとか、元々本来、どうしなきゃいけないのか、これが理想主義だとすると、そっちの元々そもそもの方を知らないままに現実だけを追いかけている政局だったり、議論とかがあつたりしますので、じゃあ、そもそもとか元々っていうのをちゃんと何処に持つておかなきゃいけないかって言うと、さっきお示しした明治天皇のこういったところ、正に明治天皇がここで仰せられたことは、例えば人間宣言ですね。

昭和天皇の元日詔書、詔書にも通じるんですけども、やっぱり国難があつて、日本人が日本人たることを失いかけた時に立ち戻る場所、拠り所を、やっぱり機会を捉えて、こういう風にお示しになっているのが皇室、天皇というご存在であると思えますし、そこに、やっぱり、これは、まあ、さっき吉野先生がおっしゃったような昔の神道とか神事と全くイコールではないにせよ、それを解り易くする形で広める為に神道という形をとって伝えられて来たこと。

やはり、これを拠り所とするというのが一つの我々の立ち戻るべきところであることを、

まあ、そういう国難の度にお示し戴いているんですが、もし日本がまた国難を迎えれば、そういったものを見失った時なのかなと。

だからこそ大東亜戦争で何故、国内が混乱したかと言うと、大変な戦争を戦っている訳ですけれど、戦争を戦っている最中に国の中枢に共産主義者が蔓延っていた訳で、それは、そういう共産主義というのが蔓延るようになったのも、やっぱり、ここを忘れかけたからではないかというのが、私は本来、政治外交史が専門ですが、そこにこういう視点を入れた上での一つの結論として、今、端的に申し上げました」

水島「その明治天皇のお話はよく分かるけど、今言ったように私が考える大祭司、祭祀翁、日本の大神主様。大神主様としての陛下が天皇というのは勿論あるし、ただ今言ったように宗教っていう風に言えないんじゃないかと。もう存在そのものが世界。つまり日本という世界と、それも、もっと言うと時空を、まあ、明治天皇は、もうちょっと前だけど、現在の126代までのね、色々個々に明治天皇、大正天皇、色々おられるけれども、そういうものじゃない形で神道そのものを宗教として見ない方が、宗教的な意味で言うとか、哲学的な存在論とか、そういうのは、実は、聖徳太子を見て解るように、仏教徒が、そういうものに凄く頼って来た。

桓武天皇もそうだったし、聖武天皇もそうだったし、物凄い仏教の信者ですよ。だから、そういうことを考えた時、私が明治の中で足りなかったのは、簡単に儒教や仏教をね、ある意味で言うと廃仏毀釈みたいな形に表われる様にしてしまった。その逆に薄っぺらさというか、どれだけ豊かな世界宗教的な、つまり神道という存在そのもののね、ある意味で言うと、自然世界そのものだから、誤解されると困るけれど、世界観とか自然観のね、自分がその一員だと。だから悠久の大義とか、そういうのも全部、説明できるんですよ。

宗教じゃないと。宗教は信じるか信じないとか色んなものが問われるけれども、我々は、もう日本に生まれたら日本そのものだからというようなことと、仏教とか、そういうものを、やっぱり軽く見てしまった儒教の問題。

だって、今、考えてみると、聖徳太子もそうだけでも、江戸時代迄で大体、さっき言った恥とか、恥の文化とか色んな在り方、人間の在り方、武士道とか全部、江戸時代ぐらい迄に作っているんですよ。だから逆にそれが明治以降、無くなったことが神道をイデオロギー化しちゃった。そここのところの抑えが利かなくなっちゃう。それに対する反抗が、こんなものでいいのかっていうのが、禅もやって儒教もやっていた西郷南洲の西南の役に表われているような、武士階級という、まあ唯物論者が言うけれども、実際には何故、そのプロテストをしたか、問い質したことありという形でいうのが、その辺のところもあるんじゃないかなと…」

久野「で、その件で一言」

水島「うん」

久野「この本にも書いたんですけども、やっぱり神道を宗教とみなしたら、おかしいことになる」と

水島「うん」

久野「つまり、今の憲法の政教分離を盾に政治家とか、特に首相が靖国神社へ行っちゃいけないとか、玉串を納めちゃいけないっていうのは、正に敵の土俵に嵌っちゃっている訳ですね」

水島「うん。そうですよ」

久野「聖徳太子の話が出たんですけども、聖徳太子が神道を軽視して仏教に嵌っていたという誤解があるんですけど…」

水島「誤解があるんですよ」

久野「全く、そんなことはなくて」

水島「はい」

久野「これも事実として明らかなのに、あまり語られないのが、例えば四天王寺を建てたという話は、いくらでも出て来るんですけども、じゃあ、四天王寺を建てる為に何をしたかと言うと、四天王寺が無事に建立されますようにということで、自分のお父さんである用明天皇をお祀りしてお宮を建てた訳ですよ。

今、正にJR森ノ宮駅前の鵠森宮（かささぎもりのみや）（通称、森之宮神社）が残っていますけれども、東大寺を建てる時だって、これは聖武天皇ですけれども、東大寺を建てる為に手向山（たむけやま）八幡宮という鎮守神の神社を先に建てた訳ですよ。つまり、聖徳太子が融合しようとしていたのは、神道という宗教と仏教という宗教を融合させようとした訳じゃなくて、神道という我々の国体そのものと、あとから入って来た仏教を融合させるというね、そこを何かお寺の方々も結構、誤解しているんじゃないかなというのもあるんですけども、ただ、私も、いくつかの神社の崇敬会とか奉賛会に入っておりますけど、本来、神道っていうのは、何かうちの神社とか、うちの神道を、皆さん、崇めて下さあいとか宣伝活動するところじゃなくて、もう古代からずっとあるものだから、それに加えて、どういう宗教で彩られて日本の文化が出来たって、その土台の部分だったのが宗教扱いされたことで、さっき、おっしゃったように一神教としての犠牲、フィクションというのが出来たあたりから、色んな問題が生じてくるようになったっていうのは、おっしゃる通りだと思います」

水島「うん。禅の世界論っていうのは、神道と殆ど一緒ですよ。だから融合できたって言うかね、色んな考え方はあると思いますけど、私が日本は凄いっていうのは、色んな外国人が入って来て桓武天皇の時はお后様も百済の方だったというね、まあ、一種の帰化人と言えば、帰化人ですよ。でも、そういうようなことをしながらでも、きちっとした敬虔な仏教徒でもあったし、神道の大祭司でもあったっていうね。

この日本の物凄さっていうのは、そこにあるんじゃないかという感じがしてね、だから、儒教と仏教と神道の3つを合わせてね、ゴチャゴチャしてやりましたよっていうことじゃなくてね。それだけ壮大な時空を超えたものをちゃんと持っているのが日本だっていうところが、私は明治維新が、実は、ちょっと足りなかったね、もうちょっと、きちっとそういうこと、さっき言った古代から江戸時代迄のことを、しっかりと、だから、本居宣長とか、そういうものを昔のことを学んできた『まねび』っていうのは真似るっていうね、このことが一番、我々に無かったんじゃないかっていうかね。

伝統というものを単に物質的に考えているという感じがして、今、大変、面白かったんですけど、大宮っていうのは、いや、実はそのことを知らなかったからね」

久野「いや、大宮の人も結構、知らなかったとかしますからね（笑）」

一同「（笑）」

水島「でも、そういうことを一個一個、鎮守の森から含めて、そういう本当に我々の空間が一体、何なのかという、今、何とかパワースポットとか言われているけど（笑）、実際、そういう風に思ってもいいんですよ。うん、そういうようなことですけども、さあ今、言ったように、この大東亜戦争、はっきり言うと、これで我々は今ボロボロになっちゃっている感じがあるんですけど、直ぐ結論は出ませんけど、どうしたらいいんだろうっていう感じがあると思う訳ですけど、皆さんに一言ずつ載きたいと思うんですけどね。鈴木さんはどうですか」

鈴木「私はね、正しい歴史観を持つということで、それには、まず80年談話という間違

いの歴史観を、まず潰さなくちゃいけないと」

水島「そうですね」

鈴木「うん。それが取り敢えず当面の課題だという風に思っています」

水島「おっしゃる通りです。はい、解りました。矢野さん、どうですか」

矢野「最初に申し上げた明治以来、幕末から160年の歴史を見た時、2回、大きく波があったんですけども、西洋列強、まあ、実質はグローバリズムと言ってもいいと思うんですけども、それに持ち上げられた40年と、そのあと警戒されて、抑圧されて、最後は破壊された40年」

水島「うん」

矢野「これが二つのサイクルがあったと」

水島「うん」

矢野「戦後の80年間というのも、やはり同じサイクルで、ある意味、利用されて、そして潰されたという経過を辿っているんですけども、いざ気が付いてみると、現在という時点は、我々があとを追いかけて、追いつけ追い越せと見て来た西洋自体が、気が付いたら幻影であったと」

水島「うん」

矢野「つまり何処かへ行ってしまっ（失笑）」

水島「そうですね」

矢野「背中が見えなくなったと」

水島「はい」

矢野「それで気が付いたら自分達しか居ないと。この日本自身が何なのだというのを、これから問い直す時代だと思うんですね。だから、先程から、西洋化するというので、日本が非常に苦悩して来た訳ですけども、実は160年というのは非常に短い期間であって、未だこれからだと。

私は正に国を開いて外来のものを取り入れる時代と、それから、それを閉じて、国を閉じて国風化というか熟成していく段階っていう時代、これも数百年サイクルで日本の歴史って辿っていると思うんですけども、これからの100年とか200年というのは、むしろ国風化の時代が来るんじゃないかと思っています」

水島「うん」

矢野「ある意味、世界との交流は勿論、こういう時代なので必要ですけども、むしろ、日本人自身が自分達は一体、何なんだということを問い詰めて、それで中で文化を熟成していく、その物質的文明というものを経済の成長とかを追う時代じゃなくて、自分達の内面というものをもっと重視して、先程から議論が出ている伝統的な神道とか、日本人にとっての神々の世界とか信仰とは一体、何なんだと。宗教と言えるのかどうかとか、例えばそういう問題もありますし、それから人間観で言えば、そもそも人間とは何だと。それで人権とかエゴイズムを絶対視するような、際限の無い戦いの世界に身を置いて、何処に幸福感があるのだと」

水島「うん」

矢野「日本人の本来の平安とか幸福というのは、もっと別の世界にあったはずだと。で、例えば、そういうことを地域とか国全体で考えて行くということが必要になっていく時代じゃないかなあと。私は、学校の制度自体を根本的に、まあ、所謂、西洋流の学生っていうのは、ある意味、やめた方がいいと思います」

水島「ねえ」

矢野「その一律教育で近代化の文明開化の時代、それに適応するように国民を一律化して

教育していった。そういう時代はもう終わっているのだから、これからは、それこそ江戸時代は寺子屋とか藩校ってありましたけれども、もっと多元的な、子供達が本当に自然の中で、そのまま生きて行けるように、それを大人達が地域毎で教えていくという、極自然な教育の在り方に返るべきではないかと。

そうすると長期に見れば、ある程度、少子化問題も回復するんじゃないかなと私は思っているんですけどね。だから共同体の回復っていうのが、もう一つ非常に重要な要素になると思います」

水島「実際、本当にね、さっき敗戦利得者達が作った焚書の問題でも、大学も今、私立も国公立も本当に、そういう意味では一律になっちゃってね」

矢野「はい」

水島「独自の教育とか色んなものが行われていないですよ。ある高校の校長先生が言っていたけど、全員、好きな所へ行かれるようにしたらどうだと。駄目な所は、みんな、もう共産主義者の学校だとしても、それでも構わないから、そこでも行かせればいいから、選択させちゃった方がいいと。それで、やりたいと思うことを一生懸命、勉強させるっていうね。そういう風にしてやらないと、今の押し付けというか一種の一律の戦後教育みたいなことをやったら、いつまでも、いいものでも生まれないっていう話を聞いたことがありますけどね」

矢野「昔は身分制社会でしたから、分を尽くすということで、その道で日本一になるとかってやった訳ですよ」

水島「そうですね」

矢野「だから大工の人だったら、もう別に学校へ行かなくとも大工だけ小学校ぐらいからやってもいいんじゃないかと。そういう風にしないと、世界に伍する様な人材は育たないと思うんです」

水島「でも、あの時代も日本の識字率って凄かったんですよ」

矢野「そうですね」

水島「外国人と比べると、町人から何まで読み書きが出来た。最初に来た占領軍の兵隊さん達は、4割以上、字が読めない人だったっていうね」

矢野「うん」

水島「こういうのを聞くと、まあ、色々ありますけど、はい。三浦さん、お願いします」

三浦「はい。そうですねえ、まあ、自分のこと、自分も含めてですけどね、私は今日、悲観的なことを結構、言いましたけれども、僕は意外とねえ、今、若い世代、今の30代以下の方々というのは、僕らの出来なかったことが出来るだろうなっていう気持ちがあるんですよ」

水島「うん」

三浦「あまり古いものに縛られずに出来そうな感じがするし、そういう人達は、むしろ、割と歴史をニュートラルに見ているような感じも、やっぱり、僕はして来ています」

水島「なるほどね」

三浦「それは、水島さん達の、或いは、皆さんの色んな努力の結果でもあると思いますから、そこは割と僕は楽天的ではあるんですよ。ただ、さっき水島さんがおっしゃった明治時代、色んなものを切り捨てたっていうのは、やっぱり、あれはねえ、とにかく急いだんですよ。とにかく急いだんです」

水島「そうですね」

矢野「インセンティブです」

三浦「とにかく、もう、あの時は、それが正しかったかどうかは別として、明治のリーダ

一達は、このままだったら、いつ植民地になるか分からないと思っていた訳で、それは、比較的正しい時代認識だったと思うので、とにかく急がざるを得なかったんですね。ですから、そういう時代に起きた色々な弊害だったんだと思いますが、その中でも、やっぱり、ちゃんと意識を持っている人達が居た。そういう歴史みたいなもの、さっきの福沢諭吉先生も含めて脱亜論を書いたことも確かですが、あれを、どれだけの悩みの中で書いたかって、今みたいな、例えば、僕が中国や北朝鮮なんて駄目だよなあっていう書き方をしたんじゃないんですよ。あの人は慶応が潰れる覚悟で、金玉均を庇って、その上で書いたものですからね。

ですから、そういう時代の人達の気持ちというのを出来るだけ、今の若い人達には意外と伝わってなかったりするから、水島さん達がこの番組でやってきたような努力、まあ、僕は、あまり効果が無いですけどね、こういう大東亜会議の演説集を何とか本にしようとかいうのも、先人がやったことを伝えるのが多分、僕の精一杯の努力かなという風に思います。

最後に一言、これで終わりますけれども、僕は、神社会に期待しても、ちょっと難しいかもしれないんですが、かつては葦津珍彦（あしづうずひこ）先生みたいに、神社の会の中から、神道会の中から、きちんと言論出来る人が居たんですよ。あと私の知っている範囲では大原康男先生ですか、まあ今もいらっしゃるのかもしれないですけど、僕、あまり、そういう人達を知らないんですね。神道はことあげせずというのもいいんですけども、今は、やっぱり、ある程度、ことあげしないと伝わっていかないものがある時代なので、久野先生がやっておられますけれども、あもう（笑）」

久野「有難うございます」

三浦「そういう作業をしていくことは、やっぱり必要かなと思います。私からはそれだけです」

水島「はい、大事な話でした。有難うございます。じゃあ、吉野さん、お願いします」

吉野「僕はねえ、やらなきゃいけないことは、やっぱり十七条憲法の一に曰くだと思っんですね。今、当時、それこそ物部（もののべ）氏とか蘇我氏とか、そういう豪族が争いだとか、旗氏（はたうじ）まあ帰化人ですよ。その派閥があって、それから在来の朝廷に居る実力者で、皇室があって、これを纏めるのに上手い事、武器を使ったのが聖徳太子だと思っんですけども、それを、じゃあ、どうやったのかって言ったら、やっぱり『和を持って尊しとなす』って、あの一連の文章だと思っんですけどね。

だから『和を以て貴しと為し、忤（さから）ふこと無きを宗と為す。人皆、党（たむら）有りて、亦達者少し。是を以て或は君父に順（したが）はずして、乍（たちま）ち隣里に違ふ（たがう）。』と。とにかく『和』だと。『和』というのは大和言葉で、それこそ調和の和だったりとかアイヌの和だったりとか、みんな、違う者達が違うものの存在そのまま纏まるっていう、先程の大東亜の発想と同じですよ。

その人達が喧嘩をすることなく集まる時に何が大事かって言ったら、この次の一文ですよ。『（然れども）上、睦びて、和（やはら）ぎ、下、和らぐ、睦（むつ）びるって睦っていうのは目へんに土、二つですから、高い高い高い視点で、土が重なっている所から俯瞰するような見方で、そして、その見方で集まる。つまり理想主義者であるんだけど、現実の高い視点から見ている人達が和した時に下、和らぐと。国民達、今、言うなら国民が穏やかになって、みんなが纏まるって。これを『何事か成らざらむ』というの、こういう国が究極の困難になっている時にやらなきゃいけないのは、これだって書いてある訳ですから、もう、これをやるしかないと思っんですよ」

水島「そうだね」

吉野「これをやるしかない。もう答が出ている訳ですから」

水島「うん」

吉野「だから、やっぱり古典を大事にして言葉を大事にして、上に立つ人達がちゃんと和していくということが、僕は、この今の困難の解決方法じゃないかと。ですから、先程、水島社長がああ貴重なビデオをお出し下さって、驚愕すると共に涙しましたけども、こういふことを見るのが、やっぱり上に立つ者が睦みて和する事じゃないかなあっていう風に思いました。

だから、もう一回、その原点に戻るといふのが大事で、これは日本人がずうっとやって来たことなので、革命じゃない訳ですよ。昔からやっていることを、もう一回、やるっていふことが、どれだけ大事かっていふことだと私は思いました」

水島「はい。有難うございます。おっしゃる様に聖徳太子のあれもね、命懸けでやっている訳ですよ」

吉野「そうですね」

水島「みんながお花畑の中で、そんなね、みんな、和を以てねえなんて言ってやっている訳じゃなくて…」

三浦「(笑)」

水島「本当に大変なぶつかり合いとかね。そういうことの中であれを出している。だから中国の儒教のあれもね、孔子さんも孟子さんも見たら、中国なんか、あの言った通りに全然なあってねえじゃねえかということだね。だから、ああいうことが出て来るっていうね。それだけ真剣に平和の事とかね、やって来たっていふことを、我々は本当に自覚しなきゃいけないっていふ気がしますね。はい、有難うございます。じゃあ、久野さん、お願いします」

久野「はいはい。ちょっと話を戻しちゃうかもしれないんですけど、さっき大正デモクラシーの話がありましたね」

水島「はい」

久野「大正デモクラシーっていふのは、戦後の今の教科書では暗い戦前と言いますか、彼らの言う軍国主義の暗い時代だった戦前の中で、まあ、例外的にデモクラシー、何か民主主義的な、自由主義的な風潮が開いた時代だったっていう誤解で、更に、最近では昭和デモクラシーなんていふ言葉もあるようですが、ただ、まあ、それは、もう大嘘ですね。やっぱり大正時代に共産主義が蔓延して、結局、そういうところに本当に、本来はそっちに寄っていったいけなような軍や政府の中枢の人もかぶれた。まあ、その予備軍である東京帝国大学、京都帝国大と、さっき東大新人会の話がありましたけども、そういうのに、かぶれていく時代だった訳ですが、さっきは共産主義やグローバリズム、そのゾンビという言い方をしましたけれども、彼らがゾンビで形骸化しているということですが、ただ、まあ、実際、彼らがやっていることだけを取り出してみると、まあ、一言で言えば、もう共産主義とか共産主義者っていふのは、今の日本での行動を見ていると、究極の御都合主義な訳ですよ」

水島「うん」

久野「例えば、対米自立だ、アメリカ軍は沖縄から出て行けって言って、じゃあ、自分で再軍備するのかと。いえいえ、軍隊は持ちませんと、そういうことを言って、とにかく、言っている事がメチャクチャですよ。ただメチャクチャなんだけども、それが罷り通って来てしまったという戦後の風潮を支えて来たそのものが、やっぱり共産主義とか共産主義的なもの、だから、私はコミンテルンは昭和18年に解散したけれども、コミンテル的なものが、そのあとも、ずうっと日本で漂い続けて来た結果だと思っていまして、やっぱ

り共産主義の脅威っていうのを、もうちょっと戦前の歴史を見る中で注視しなきゃいけないのは、さっきも出て来た大東亜会議ですね。大東亜会議だって本当だったら、鬼畜米兵という掛け声は当時、あったんですが、ただ終戦前後の動きを見てみると、鬼畜だったのは、まあ、米も鬼畜だったりしたんですが、しかし、それ以上にソ連とか共産主義は鬼畜だった訳じゃないですか。

だから、その共産主義に対するめくらましが、どうやって日本で、そういうフィルターが変に出来てしまったのかということ。あとは最後に、今日は、一応、大東亜戦争のことがメインテーマなので、その大東亜戦争は、昭和16年12月のタイミングと国際情勢で日米開戦したのが本当に良かったのかどうか、これは議論が分かります。

出来れば、あんな、日本にとって不利な状態で日米開戦はしない方が良かったんじゃないかと、私は思います。じゃあ、あの時に日本が対米英蘭開戦ですね、アメリカ、イギリス、オランダに対して開戦しなかったら、植民地はそのままだったのかと言うと、そのままですら無かった訳ですよ。もしかしたらソ連が日本に先駆けて、彼らの解放は、別に日本の解放と違って共産主義化することですからね。

だからソ連が日本より先に東南アジアとか、場合によってはインドも解放していたかもしれない。そうなると、日本が大東亜戦争に立ち上がっても戦後、残念ながら、あれだけ共産主義化しちゃったんだから、それ以上に、もう真っ赤っかの世界になったかもしれないところで、真っ赤っかを一応、ギリギリちょっとは食い止めたというところが大東亜戦争の、ちょっと中々議論の難しいところで、まあ、よく言われる通り、母体を損なったけれども子供がスクスク育っているという言い方をするんですが、スクスクと共産主義国になっちゃ困る訳ですので、共産主義とか共産主義の脅威という側面からの反省という言葉は、あまり使いたくありません。本当の教訓を得るとというのが、大東亜戦争の議論の時は不可欠じゃないかという言葉で閉めさせて戴きたいと思います」

水島「そうですね。やっぱり、その問題は未だあまり議論されていないところがあり、北進論と南進論っていうね、日本は南進論を選んだ訳ですよ」

久野「そう。ソ連を放ったらかして…」

水島「そういう事、その辺の問題も、あまり議論されていないところが確かにありましたね」

久野「はい。だから、これ、ほんとに今日、しつこいですけど、近代が始まる時に明治天皇がお示しになったものを、もうちょっと拳々服膺していれば、共産主義に対する備えも出来たんじゃないかと悔やまれるところでございます」

水島「はい。有難うございます。モーガンさん、お願いします」

モーガン「はい。有難うございます。今日は本当に貴重なお話を聞かせて戴いて、感謝を申し上げたいと思います。先程、お見せ下さった映像の中で、広田弘毅が映っていたんですけども、色んな陸軍の方々の中で広田弘毅っていう外交官と一緒に立っていて、やっぱり広田弘毅は玄洋社、斡旋とかを受けて、支援を受けて育った福岡の人間だと思って、そういった、もう一度、復興の精神って言いますか、九州の精神に立ち戻って、日本の再生を考えたいと思っています。

あとはブレークニー。本当に重要な人物だなあと思って、お陰様で拙稿、ブレークニー等に関する論文が、運が良ければ来月に出ると思います。色んな、そういった研究をやっている中、ブレークニーだけではなくて、アメリカ国内から、そういったアメリカの支配層が外国に対して、もうアメリカの法律とかを使って帝国を拡大しようとしている、そういう動きに対して、抵抗していた人間があったなあと改めて思って、例えばブレークニーは東郷重徳と親しくして、もう一人、ジョージ・アーネスと言うんですかね、そういった弁

護士が居たんです。そういったアメリカの歴史を取り戻さなければならない。

しかし、それが完全に消されて、アメリカは法治の国とか民主主義の国ではない。そのような嘘を暴かなければならないなあと、私は考えています。あと、もう一つ明治維新から大東亜戦争のあとからで、今の拝米保守時代に入って、大きな教訓があると思って、それは日本国民が必ず中央政府に裏切られるっていうことだと思えます。

『和』っていう、この和えるっていう言葉が先程、吉野先生のお話に出たんですけど、正にその通りだと思えます。例えば尊王攘夷とか会沢正志斎、そういった考え方が必要だと思うんですけども、それと同時に遠山満とか西郷隆盛、そういった八紘一宇とか、そういう考え方と言うよりも深い感情を持っている人とか、そういった要素が必要だと思っていて、明治維新とは何かと最近、考えているんですけど、これから言うことは、多分、大反発を招くかと思えます。

その覚悟で、敢えて言うんですけど、明治維新って天皇陛下を拉致した奴がやったんじゃないですかと。天皇陛下を持ち上げて、実際に自分達がやりたいと思っていたことを、天皇陛下を盾として使って、だって、神道をイデオロギー化した連中が明治維新の連中だったじゃないですか。

現実主義っていう言葉は先程、久野先生がおっしゃっていたんですけど、それが現実主義という言葉が出ると、どう考えても、それは妥協の言い訳にしか聞こえない訳ですよ

(笑)、もう現実主義、今で言うと、日本の中で一番の現実主義者とは誰かと言うと、櫻井よしこじゃないですか。もう現実主義ばかり言っていて…」

水島「(笑)」

一同「(笑)」

モーガン「王政復古とかと言いながら、明治維新の人々は、実は、天皇陛下を裏切ったじゃないかと。やっぱり西南戦争の精神が一番、大事だなあと、西郷隆盛のことを天皇陛下が最後にね、私の事を唯一愛してくれたのは、あの西郷隆盛とおっしゃったじゃないですか」

水島「うん」

モーガン「多分、その魂の部分が一番、重要だなあと、『和魂洋才』、それは必ず失敗で終わるじゃないですか」

水島「うん」

モーガン「それが、もう一つの大きな、中国が一つの世界。日本が一つの世界」

水島「うん」

モーガン「そうだと考えると、いくつかの部分とかパーツを入れ替えて、アレンジは出来る訳ですけど、でも西洋は世界ではなくて、人間の世界を壊す為にある癌とか病だと思えますので、例えば吉野作蔵の民本主義とか里見岸夫のプロレタリアと天皇主義とか、そういった和魂、和洋折衷をやってみた人は失敗で終わったので、それが一つの大きなポイントだなあと。

最後です。何をすればいいか。玄洋社達は明治維新のやり直しとか言って、じゃあ、私はアメリカ革命のやり直しが必要だと思えます。そうしない限り、日本は多分、自由にならないと思えます。この国を占領している、あのモンスターを殺さなければ、この日本を始め全世界が自由にならないと思えます。因みに自由って、西洋の人々は誰から学んだかって言うと、ネイティブ・アメリカンですよ。自由を味わったことのない白人が大陸に渡って来て、インディアンと話し合っ、自由ってどういうことかと初めて知って、それを自分の考えだと隠蔽して、でも元々辿り着いたら、それがインディアンの考えで、あと、東京裁判のやり直しすれば、いかがですか」

水島「うん。いいですね」

モーガン「東京裁判はでっち上げ裁判、私達民間人でも出来る、左翼が大好きな民間裁判、私達も出来ると思います。あと最後です」

水島「うん」

モーガン「大東亜戦争を終わらせることが大事です。未だ続いています。情報戦が未だ続いています」

水島「そうですね」

モーガン「大東亜戦争は未だ終わっていないから、やっとあの米軍を追い出して、あの嘘ばかりつく連中を追い払って、日本の魂を取り戻して、それは明治維新の終わりでもあるかもしれないし、大東亜戦争の終わりでもあると思います。以上です」

水島「はい。有難うございます。南京の映画を作った時、モーガンさんが言ったように、これは何とか東京裁判の南京部分だけですけども、再現の法廷をつくってやりたいっていう話をしていますが、未だ実現してなくて、お前は言うだけ言ってやっていないんじゃないかって言うけど、色々やっているんだよというね（苦笑）、そういうことですけど、ただ、おっしゃるように本当にAIとか何かを使って、少なくとも本当に、どうにか再現できないかなあと思っているんですね。音声だけでも。

まあ、色々沢山、やっているんでね、今度、南京攻略戦の全部のありったけのフィルムとかをつくって、今、編集を始めているんですけどね。ただ、YouTubeでも何でも勿論、やれないしね。先程の例を言うと、大東亜会議のフィルムは、あるんですよ。NHKが持っているんです。NHKが持っている、あれは20秒だかそこらの映像ですよ。我々が、それを売ってくれと言ったら、いくら要求して来たと思います？何と200万円ですよ。ふざけんなっていうね。そんな金が何処にあるんだってね。

だから、しょうがないからフィックスの写真は何枚か使ってやるしかなかった。僅か20秒で、お前が持っているんじゃないだろうと。元々、たまたまNHKに記録が保管されていただけであってね、こういうことなんです。つまり、やらせたくないんです。

例えば、あの南京の映画の冒頭に出て来た桜の画があるじゃないですか。セットも処刑場のセットも造ったのはTBSの緑山スタジオ。最初、知らないでオッケーしちゃったら、シナリオを見て大変だと」

一同「(笑)」

水島「それで何とか撤去費用から何から補償も出しますからやめてくれませんかって言うから、やめるもんか、馬鹿野郎って言ってね、それで、どんどん建てちゃってやったんですよ。それから日活の撮影で、室内のシーンも日活撮影所だって最初、断って来たんですよ。凄いですよ。左翼の人が多からってというのは解るけど、例えばあの処刑場のあった巢鴨プリズンの所が公園になっているんですけど、そこで、あの二人居た子供がちょっとお祈りしているっていうシーンは作ったんですが、その撮影許可を公園でやると言ったら最初は断られたんですよ。

別にここでアクションをする訳じゃないし、ただ、お祈りしているだけのシーンだということに怒鳴り込んで大騒ぎしたら、しょうがないから許可した。このぐらい役者も、7人の東条大将を始め松井大将も含めて必要ですが、本当に役者も左系の人が多いから。ガンガン断って来る訳ですよ（失笑）、あの役者の皆さんは本当に、よくやってくれたと思うんです。みんなねえ、本当に全然、表現の自由が無いです。

極左の人達は、左翼系は、いくらでもやれますけどねえ、私みたいなのは本当に、場所を一か所、決めることだけでも妨害されるっていうね。そういうことで（失笑）、本当にビックリしますよ」

鈴木「はい、よく解りました」

水島「ええ。本当にね、あのアメリカのフィルムもそうですけど、だからチャンネル桜を開設した時も本当に、そういう中で始めたんですね。ただ、それだから今、色んな保守系のサイトとか、あまり私は信用していないんだけど、色々なところが出て、色んな事が発言できるようになったことは凄くいい事だと思っています。本当に直接、正面に立つと、ガツンガツン来ますからね。負けずに頑張りたいと思いますけどね（苦笑）、はい。

ということで今日は『幕末・明治維新から見た大東亜戦争』というテーマでしたが、間もなく大東亜戦争、8月15日、終戦ということになります。最後に、もう何度も言っていることですが『戦友』という歌があります。『ここは、お国の何百里、離れて遠き満州の赤い夕陽に照らされて、友は野末の石の下』と、こういった歌がありますけど、実は東条大將が、これを女々しいと。ドイツ系の男らしいものにしないと、外国人が聞くと反戦歌に聞こえるって言って、これを禁止したっていうことらしいですけど、自刃した文芸評論家の村上一郎さんっていう方が、これこそ日本の兵隊の強さだったって、世界一強いつて言われた兵隊はよく泣いたと。

勝って泣き、負けて泣き、そして友が戦死したら泣き、この涙こそ日本兵の強さだったというね。こういうことを書いていて、感心したことがあるんです。皇室の神武天皇以来、今日まで126代、皆さま、詩人ですね。御製を創り、皇族の皆さまは全員、御歌や色々な歌を作る詩人の人達で、歌詠み、こういったものも、先程、吉野さんが言葉の話をしたけども、一つ一つの言葉に大神主様として、或いは、皇族としてのそういった言葉の大切さを、ずう〜っと大事にして来た歌心を、ずっと持って来たっていうね。

これも本当に大事な大事な、我々の国が、実は物凄い国だと。ハンチントンが、はっきり、世界文明の中の一つだと、1億人しか居ないけども、本当に独自の文明だっという風に認めたことを、もうちょっと子供達に胸を張って伝えられるといいなと思います。実は、この間、特攻隊の演劇をやるから観に来てくれって言われたので、一回、行ったんですけど、その中で製作の方が、特攻隊を美化するつもりは無いが、特攻隊を美化するつもりは無いがって言うんでね、私は内心、何故、美化しちゃいけないんだってね」

一同「(笑)」

水島「美しいじゃないか、凄いじゃないかっていうことなのに、本当に、何か決まり文句みたいにね、弁解がましく言うのは、本当に辛かったっていうことがありました。もう、ちょっと子供達に誇りある日本の素晴らしさを伝えたいと思います。

間もなく大東亜戦争の終戦80年になります。今日は、皆さん、どうも有難うございました」

一同「有難うございました（礼）」

\*\*\*\*\* お わ り \*\*\*\*\*